



特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡 VI

昭和49年度
発掘調査
整備事業概報

福井県教育委員会
朝倉氏遺跡調査研究所

目 次

はじめに	1
第10次・11次発掘調査	2
調査の概要	
発掘された遺構	
発掘された遺物	
第12次発掘調査	14
第14次発掘調査	14
第13次発掘調査	15
発掘された遺構	
発掘された遺物	
環境整備	25
石造遺物の調査	28
研究所要項	30

P L. 1 一乗谷中心部	第1図 発掘区位置図
P L. 2 一乗谷中心部垂直写真	第2図 第10、11次発掘遺構実測図(1)
P L. 3 第10・11次発掘区全景(新馬場)	第3図 遺構実測図(2)
P L. 4 道路全景・道路北部	第4図 遺構実測図(3)
P L. 5 暗渠・排水溝・道路側溝	第5図 遺構実測図(4)
P L. 6 門・礎石建物・中心部	第6図 遺構実測図(5)
P L. 7 井戸・通路・石組溜拵群	第7図 一乗谷中心部街割推定復原図
P L. 8 出土遺物(1)	第8図 遺物実測図(1)
P L. 9 出土遺物(2)	第9図 遺物実測図(2)
P L. 10 出土遺物(3)	第10図 遺物実測図(3)
P L. 11 第12・14次発掘調査全景	第11図 遺物実測図(4)
P L. 12 第13次発掘調査全景(中の御殿)	第12図 第12次、14次発掘調査遺構実測図
P L. 13 礎石建物・下層溝	第13図 第13次発掘調査遺構実測図
P L. 14 北西隅石垣、土塼北面石垣	第14図 中の御殿西北隅石垣実測図
P L. 15 空壕及び湯殿跡庭園側石垣、出土遺物(1)	第15図 湯殿跡庭園南面石垣実測図
P L. 16 出土遺物(2)	第16図 出土遺物(1)
P L. 17 出土遺物(3)	第17図 出土遺物(2)
P L. 18 出土遺物(4)	第18図 出土遺物(3)
P L. 19 蛇谷・遊歩橋・民家立退地整備状況	第19図 出土遺物(4)
P L. 20 武家屋敷跡整備状況	第20図 出土遺物(5)
P L. 21 石 仏	第21図 武家屋敷跡整備図

は じ め に

本年度は、第10次、11次、12次、13次、14次の発掘調査と、蛇谷、武家屋敷の環境整備、一乗谷の石造遺物の調査、朝倉氏関係の古文書調査を実施しました。

第10次に引き続いた武家屋敷跡の発掘調査では、水田の下から戦国時代の街並を確認いたしました。この成果は、この一乗谷の構造、ひいては、戦国時代の都市を研究していく上で、貴重な資料となることと思います。来年度は、こうした点をさらに進めるため、道路と一乗谷川の間を全面発掘し、この一画に戦国時代の街並を保存展観したいと考えています。

石造遺物の調査も、本年度をもって一応一乗谷内を終了し、約3000体を確認、記録することができました。こうした石造遺物を、どう保存し、いかに有効に史料として生かしていくかが、今後の大きな課題です。

なお、本年度事業の実施にあたりまして、文化庁記念物課、奈良国立文化財研究所、特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡調査研究協議会の各位より、貴重な御助言、御協力をいただきました。また城戸の内をはじめ、地元の皆様には、有形無形の暖かい御援助をいただき心から感謝の意を表します。

昭和50年3月

朝倉氏遺跡調査研究所長 河原純之

第10次・11次発掘調査 (通称新馬場跡)

調査の概要

昭和48年度までの発掘調査等により、一乗谷の中心となる、朝倉氏の本館跡を全面調査することができた。そこで本年度は、こうした成果をふまえ、家臣の屋敷を全面発掘する計画を立て、その調査の主眼を次の2点においた。(1)、本館に対して、給人家臣の屋敷の構造、及び物質文化の内容をとらえ、比較すること。(2)、一乗谷内の街割りの資料を得ること。

上記の目的にそい、福井市城戸の内町字平井通称「新馬場」に発掘区を設定した。ここは、本館、中の御殿の対岸にあたり、整然とした区画の水田が並び、土塁の名残りが残っている。字名、水田の通称に家臣の名が使われることから、家臣団の屋敷の存在が推定されていた。

調査は良好に残る2本の土塁を包括する3665㎡を2次に分けて行ない、各々、第10次調査、昭和48年8月1日～49年3月30日、2425㎡、第11次調査、昭和49年4月2日～49年8月5日、1240㎡とした。

発掘された遺構

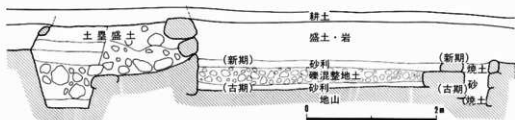
2次に及ぶ発掘調査の結果、南北に走る道路を中心に、各々土塁に囲まれた屋敷群を検出した。屋敷は、道路の東西に伴行する南北方向の土塁2本と、それに直交する東西の土塁2本とによって区画される。発掘区内においては、道路の西に3屋敷、道路の東に少なくとも1屋敷以上を検出した。

以下、各々について概要を述べる。

道路 (S S 260) と付属遺構 P L. 3、4、第2、3、4図

西の山裾から67m、現在の一乗谷川から約40mの位置に、ほぼ南北に走る道路を検出した。ほぼ一乗谷川に等間隔に走ると思われる、巾は4.0～4.3m、発掘区内長53mで、砂利敷である。北に向かってゆるく北の勾配をもつ。また東に向かって傾斜しており、路面上の水を東に付属する幅40cmの石組側溝 (S D 268) に集める。この側溝には、道路の西の3屋敷からの排水溝 (S D 269、271、273、274) も道路を横断して接続する。これらの排水溝は、道路の西側の土塁を暗渠 (S Z 270、272、275、276、277) でくぐり、屋敷内に繋がる。

道路及びその付属遺構には2期の遺構面があることが観察できた。古い方を古期、新しい方を新期とする。トレンチによる道路の断面の観察によれば、新期の道路面砂利敷下約30cmに、同様の砂利敷面が認められるが(挿図1)、この新旧の面は、排水溝 (S D 271) と排水溝 (S D 273) の面に対応する。石組側溝 (S D 268) は大略3段に石を積み、その第1石目は小さく、東へずれ、頂部も平坦にそろっている。また、この側溝内の断面にも、2回の焼土層を認めた。



挿図1 土壘・道路断面図

土 壘 P.L. 3、4、第2、3、4図

土 壘 (SA 261、264、265) 道路西側の南北方向の土壘で、発掘区内約50mに及び、さらに南北に延長することを確認できた。基部巾は南部で270cm、北部で180cm、道路面からの残高は、50cm、110cmであり、道路側は、大きな石材が用いられており、石材は、一乗谷の凝灰角礫岩である。数石おきに特に大きな岩が用いられているが、調査時には、これらが道路面上に引き倒され、さらに、道路巾分が、この土壘を構成した岩で盛ってあった。暗渠5、門1をもつ。

土 壘 (SA 266) 道路東側の南北方向の土壘で、発掘区内53mに及び、さらに南北に続くと推定される。基部巾は120cmで、道路面より上は水田のため削平を受けて残らないが、基部巾がせまいこと、石材が小さいことから、西側の土壘(SA 261)に比べると、小規模と思われる。土壘の基底は、古期道路面より下にあり、西側の土壘と共に、道路と同時に構築されている。南端から30mの位置に門(S I 279)があり、同じく23mの位置に井戸(S E 358)がある。またこの門より北では、土壘内側に巾100~150cmの石垣をもった武者走り状の遺構が付属する(P.L. 4)。

土 壘 (SA 262) 土壘(SA 266)に約5°ふれて接続し、「新馬場」と「ショーゲドン」とを隔てる。基部巾は210~230cm、西の山裾へ向かって50.5mを確認した。この土壘はその性格にふさわしく、両側面がほぼ同じ大きさの石材で構築されている。

土 壘 (SA 263) 土壘(SA 266)にはほぼ直角に接続し、西の山裾まで約60mを確認した。「新馬場」と北隣の屋敷を隔てる土壘で、北側が低いためか、北面に比較的大きい石材を用いる。南の土壘(SA 262)とは、東端で内法42mの間隔をもつ。基部巾は170cmでSA 262よりせまい。

新馬場 P.L. 3、6、7、第2、3、4、5図

道路に沿った南北方向の土壘(SA 261)とそれに接続する東西方向の土壘(SA 262、263)によって区画され、東の道路に門を開く。西は山を負い、南北は隣り屋敷である。土壘に囲まれた面積は、約2,550㎡(約773坪)である。

調査の結果、大きく3時期の遺構面があることが判明した。I期は、道路や土壘と共に作ら

れたこの屋敷の開始の時期で、道路の古期に比定される。II期は、屋敷内の改造された時期、III期は、後述するように性格が大きく変化し、その終了が、この一乗谷の滅亡の時である。

門（S I 278） 北より11.5mの位置にあり、土塁を340cm巾に切って作られた門で、2段の石段をもつ。構造は明らかではない。

礎石建物（S B 280） 門を入ったすぐの所にあり、70cmしか離れていない。南北3間（190、190、190）、東西3間（190、340、190）で東西棟と推定される。西北隅と東南に石敷を伴なう。南北3間の中央の柱間が、門のはほぼ正面にあり、位置的に近接し、門との関連をもつ建物と考えられるが、具体的には不明である。

掘立柱建物（S B 281） 門より西へ約26mの位置にあり、北へ寄って通路（S S 335）に面している。南北5間（7.9m）、東西2間（3.7m）で南北棟である。方位はS B 280と同じで北土塁（S A 263）に規制される。この東側にも柱穴群と1辺30～50cmの方形の浅い灰穴があり、井戸（S E 291）と石敷でつながる。

中央排水溝（S D 312） 巾40～50cmの石組の溝で、南側に巾120cmの縁石をもつ通路を伴なう。この溝に集められた水は、東へ流れ、石組溜枡（S F 283）、暗渠（S Z 272）、排水溝（S D 271）を経て道路側溝へ通じている。

櫓（S A 300、306） 中央排水溝にそってすぐ北にある東西方向の櫓（S A 300）とそれに接続する南北方向の櫓（S A 306）で、皮付丸太で作られ、各々27m、15m続き屋敷の西北隅を区画する。S A 300は少なくとも17本以上より成り90～180cmの柱間をもつ。S A 306は13本以上より成り、100～150cmの柱間である。各々、よく似た櫓跡が付随しており、おそらく同じ機能をもつ櫓で、作り換えの結果と考えられる。

砂利敷（S X 360）、井戸（S E 295） 井戸を北端として、南北約6m、東西約7mの範囲によくたたきしめられた砂利敷面があり、井戸（S E 295）を付設した建物があったと推定された。井戸は上面径0.9m、深さ1.6m、石積みである。

井戸屋形（S B 298）、井戸（S E 294） 井戸は上面径0.9m、深さは1.7mで、通路（S S 282）に向って石敷をもつ。この井戸に伴なう屋形は、東西約1.4m、南北約2.2mで円柱の掘立てである。

I、II期の屋敷内を概観すると、主要な溝や櫓等によって大きく6ブロックに区画されている。まず屋敷全体が中央排水溝（S D 312）によって南北に21m（70尺）ずつに分けられ、各々がさらに溝（S D 313、317、319、324）や櫓（S A 306）により小区画される。そして、2つの通路（S S 282、335）は各々溝に沿って、その小区画を東西につなぐ役目を果たす。

中心的な区画は、門をはじめ、礎石建物、掘立柱建物をもつ、中央排水溝と石組溝（S D 313）にはさまれた区画で、この区画の奥半分には、すぐ北の土塁と石組溝（S D 313）に区画される石組溜枡群や井戸と関連する雑舎があったと考えられる。さらに溝 S D 324と、319とに

はさまれた区画も建物群があったと推定できる。また直交する2本の柵(SA300、306)に区画された北西隅には、井戸2、石組溜枘1、馬蹄形の石組遺構(SX344)、柵、掘立建物の痕跡と考えられるピット群等があるが、いずれも保存が悪く、その性格は不明である。屋敷の東南の区画は、遺構がほとんどない部分である。

最も新しいIII期は遺構が少なく、柵(SA304)、井戸(SE292、293)等があり、東半分が全面バラス敷で非常に硬い面であった。おそらく「新馬場」の通称はこれに関連するものであろう。

柵(SA304) 角柱の掘立で、南北に6間分あり、柱の間には石列をもつ。北から3間目だけが石がなく通路かと思われる。柱間は180cmで土塁(SA261)に方位を合わせる。

井戸(SE292) II期の通路を毀して作られており、上面径は1.0m、深さ2.9mで底近くに多量の焼土、壁土と共に、井戸屋形の部材や木製滑車、軸受等の炭化材、鉄鍋、五徳、鍬、鍬頭金具、飛馬文染付茶碗等が出土し、その上は細かい角礫で人為的に埋められていた。

このIII期の終りが、一乗谷の焼亡した天正元年と比定されよう。

「ショーゲドン」 PL. 3 挿図2

土塁(SA262)により新馬場と接し、発掘区南端にかかった屋敷で、石組溜枘(SF326)と土塁を暗渠(SZ270)でくぐる排水溝を検出した。南側の水田の通称が、「ショーゲドン」であり「将監殿」と思われ、春日神社所蔵の「一乗谷古絵図」にある「鰐淵将監跡」に比定できる。

北隣屋敷 PL. 3 第4図

新馬場の北隣の屋敷で、土塁(SA263、265)により画される。発掘区の北端にかかったため、詳細は不明であるが、土塁裾に、側石をかなり抜かれた石組溝(SD316)があり、暗渠(SZ275)を通り、石組排水溝(SD274)を経て道路測溝に至る。

東隣屋敷 PL. 3 第2図

土塁(SA266)に、間口1310cmの掘立柱の門(SI279)と、土塁裾に井戸(SE358)が検出され、道路の東にも屋敷の存在が予想された。確認のため、3m巾のトレンチ2本を、発掘した。門(SI278)の延長上の北トレンチでは、石組溜枘1と礎石建物1棟が焼土層下に確認され、土塁(SA262)の延長上の南トレンチでも、石組溜枘1、石列等を検出した。

この屋敷は道路と一乗谷川にはさまれ、奥行は30mである。間口は、南北30mずつ水田の高さが違い、高い南半を「オコヤシタ」と通称している。「一乗谷古絵図」では、「新馬場」と「鰐淵将監跡」の間の川沿いに「平井」とあり、この付近と推定される。



挿図2 「ショーゲドン」

街割について

道路網 この地区での街割の基本的な構成を観察すると、近世の城下町における侍屋敷地区と同様に、まず道路網が屋敷割に先行して計画される。道路網は、南北に長い通り抜ける谷の性格上、谷に沿う南北方向が幹線となる。後述するように、一乗谷川の東と西に各々1本が造られた。西の幹線が発掘区内の道路（SS 260）と考えられ、幅員を入れて4.5m（2.5間）の幅員をもち、川から約30m（17間）間隔である。この2本の幹線道路に対して、中の御殿の南側土塁の外にあるような幅員3m（1.7間）と少し狭い東西方向の道路がとりついている。

天正5年に書かれたといわれる『朝倉始末記』の「永禄11年5月17日朝倉屋形へ御成 御門役辻園の事」の記事を見てみたい。これは、將軍義昭が「一乗谷滞在中に、義景館へ行った際の」記事で、その時の館の門と辻々の警護役を羅列したものである。この「朝倉屋形」とは、本館のことであり、義昭の滞在した館は、上城戸の外「御所」と呼ばれる地にあたると思われる。順に記すと、「大橋の通」、「柳馬場[※]」、「坂野ヶ小路」、「上殿の橋の通」、「遊樂寺の前[※]」、「三輪小路」、「笠間小路」、「魚住彦四郎前」、「魚住前」、「河原前[※]」、「木戸の本[※]」、「此美前」、「齊藤前[※]」、「小林前[※]」、「クラカリ谷」、「森前」となる。※印は、字名、通称等からその位置を推定できるものである。この記載の順を見ると、本館の門役に続いて、本館周辺からいったん、下城戸の方へ書き、その後、上城戸を経て「御所」の方へと書いている。

また、この書き方には①「——の橋の通」、②「——小路」、③「地名」、④「(人名)前」とがある。この中、①と②は当時の街路の構成を示すと考えられる。①は、一乗谷川にかかる主要な橋を中心とした東西方向の街路であり、②は、中の御殿の南側の道路のように、南北方向の幹線に交わる、東西方向のいく分狭い街路と推定される。南北方向の幹線の呼び名は不明だが、この辻々の記載の中に入らないことから逆にその道路が通行された幹線と考えられ、前述の屋敷が並び、いくつかの小路が交わっていたと考えられる。しかし、この場合、川の西に推定されるいくつかの屋敷名が見当たらないことから、川の東側の幹線道の存在が推定され、義昭の一行は、そちらを通行したと思える。

以上のように、一乗谷内の主要街路は3種類より成っていたと推定され、地割等から、これらの道は、何ヶ所かの「矩折」部を持っていたと考えられる。

屋敷割 今回の発掘調査により検出した4屋敷について見ると、先述したように、線としての街路が優先しており、次にこれを基準に間口を決める方法がとられている。屋敷そのものは、道路に沿う南北方向の土塁から、山裾と川までを土塁によって仕切られる。新馬場の場合は、南北の両土塁は各々巾2.2m（1.2間）、1.9m（1間）であり、その内法間口は43.3m(24間)、芯々で45.4m（約25間）である。奥行は55～65mで、山裾の凹凸による。東側の屋敷の場合は、トレンチ発掘のため、道路と川を結ぶ土塁は確認されていない。前述したように、水田等の地

割から推定すると、間口も奥行も約30m（約17間）である。

発掘の結果、現在の水田の地割が、比較的当時の屋敷割を保存していると考えられたことから明治9年の地籍図、航空写真（P.L. 2）、地形図等や山裾に残る土塁の残存部等から復原したのが第7図である。

これによると、道路の西に少なくとも11区画（ $W_1 \sim W_{11}$ ）、東側に8区画（ $E_1 \sim E_8$ ）以上を認めることができる。間口は、おおよそ2種類が推定され、Aは新馬場と同じ約24～25間のもの、Bは、約17間のものであり、西側は両者が混在しており、東側はBのみのようである。参考までに面積を概算したのが次の表である。

また、その備考欄に、「一乗谷古絵図」や字名、通称より推定した屋敷名をつけた。

表-1

区画	間口	面積㎡		区画	間口	面積㎡		
W_1	B	1540㎡ (465坪)	齊藤	W_{11}	A	2280㎡ (691坪)	カ市原	
W_2	B	1300 (394)		W_{12}	A	1450 (439)		
W_3	B	1480 (449)		E_1	B	990 (300)		
W_4	B	2100 (636)		E_2	B	1050 (318)		
W_5	B	1900 (576)		E_3	B	960 (291)		
W_6	A	2550 (773)	新馬場 ジョーヤデン 鯉淵将監	E_4	B	760 (230)		オコヤシタ カ平井
W_7	B	1250 (379)		E_5	B	860 (261)		
W_8	B	1290 (391)	カ朝倉三吾	E_6	B	725 (220)		
W_9	B	1200 (397)		E_7	B	720 (218)		
W_{10}	?	1000 (403)	河合安芸守	E_8	B	765 (232)		

この表を見ると最も広いのが W_6 。新馬場で約773坪、最も狭いのが、 E_7 で約218坪である。また道路の東側のE列はその屋敷割から狭く200坪から300坪に集中している。一方、西側のW列では、300～400坪に集中するグループとそれ以上のものとに分けられる。この場合、同じグループ内での小異は屋敷割の方法によるとしても、おおよそ3段階になる面積のランクづけのもつ意味は何かであろうか。特に道路をはさんで東西の差は大きい。

ちなみに、本館は、6510㎡（約1973坪）、中の御殿は1930㎡（約585坪）、湯殿跡は1530㎡（約464坪）、新御殿3850㎡（約1167坪）である。湯殿跡を除けば、いずれも飛躍的に大きく、別格であることを示している。この中で、 W_6 。新馬場は、朝倉一族の館と考えられる中の御殿よりも広く、面積の上では、かなり上位にあたる。しかしながら、その第III期において、屋敷が廃絶されたことを考えると、単に広さからだけでは、割り切れない部分が多い。今後、こうした屋敷地の配分、広さ及び位置、構成等を今後の発掘の成果をまっとう有機的に考えてみたい。

発掘された遺物

第10次、11次調査の結果採集された遺物は、陶磁器類、土師質の皿、土釜、瓦質の陶器等の焼物と、銅銭、鉄釘等の金属製品、火炉、硯等の石製品であり、全体に遺物の保存が悪く、量も少ない。以下、各々についてその概要を述べる。

越前焼 第8図1～5

出土した越前焼は、甕、壺、浅鉢、播鉢、火桶等で、中でも壺、浅鉢、播鉢が特に多かった。甕は大形のもの和小形のものがあり、前者にはへら書きの記号とスタンプによる「本」印が肩につく。時期的には、15C後半から16Cにかけてのものと、16C後半のものに分けられ、後者が圧倒的に多い。

壺は、お南黒壺と呼ばれる鶯口の小壺も含めて、7類に区分されるが、第8図1は、その中でも最も一般的なものである。口縁直下とつけ根に凹線をもつのが特徴で、肩はなで肩で胴に最大径をもち、大き目の底部につながる。肩にへら書きの記号をもつ例もある。

浅鉢は約5類程が認められるが、第8図4が最も多い。大きい底部から口縁へ直線的に開き、口径は平坦に切られ、直下に1本の沈線がまわる。口縁の1部に指によって作られた簡単な片口をもつ例が多い。櫛状工具による同心弧とへら書きの記号をもつ。口径は31.5cmを計るが、1尺を意識して製作されている。3のように付高台と明瞭な片口をもつ浅鉢が少量あり、15C後半のものなのであろう。

第8図5は最も一般的な播鉢で、直線的ないし、少し開いた胴をもち、内に傾斜して切られた口縁をもつ。その直下にはへらによって引かれた沈線又は段を有す。播目は櫛書きで7～9本が多く、上で少しずつ間をおいて引かれる。口径には1尺以上のものと、6～8寸のものがあり、5は後者に属す。

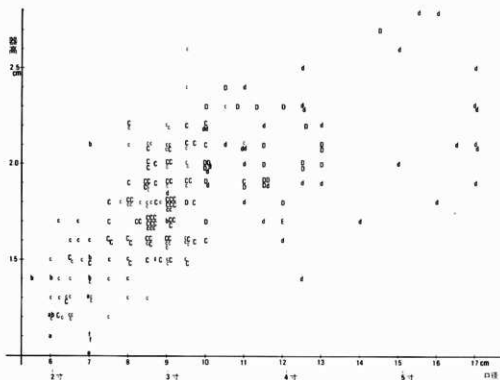
土師質土器 第9図8～33 第10図34、35

土師質土器には、いわゆるカワラケと呼ばれる皿と、直径2cm未満の土鈴、羽釜等がある。**土師質皿** その器形、基本的な整形技法等の分類により、A～G類に分けられる。B類は、粘土をせんべい状にしたものから、手つくね又は、曲げた肘に押しあてて型取りしたままのもの。前者のB類に、内面に親指、口縁外面に人差指をあて、時計回りにナデ回し、そのまま外に抜いたものがC類、前者のB類の平坦に作った見込をヨコナデし、その後、内面見込屈折部までを親指、外面口縁部を人差指ではさみ時計方向のナデ回しをしたものをD類とする。C類にさらに底裏から指頭で突きこぶを入れたものをA類、見込にへらを斜にあて回転整形したものをF類、化粧土をかけた浅い皿とつまみをもった受け皿とから成るものをE類とする。E類は時期的に新しいと考えられる。

口縁全周の5以上の破片について、分類し、実数とその比率を示すと次のようである。また各類の法量を示したのが挿図3で、大文字はタール痕のあるもの、小文字はないものを示す。

	A類	B類	C類	D ₁ 類	D ₂ 類	E類	F類	計
新馬場	5	9	144	53	15	1	2	229個
	2.18	3.93	62.88	23.14	6.55	0.43	0.87	(%)
本館	6	15	161	64	9	3	0	258個
	2.32	5.81	62.40	24.80	3.48	1.16	0	(%)

以上の観察によれば、A、B、E、F類は少なく、使用の度合いも低く、口縁の1部にわずかにタール痕を残す。口径からは、このA、B、F類が2寸用として作られたと考えられる。C類は法量図から6cmを中心とするC₁類と9cmを中心とするC₂類とに分れ、各々2寸用、3寸用として作られている。C₂類の構成比は約60%で、この中半数がタール痕をもち、その器体が見えない程付着している例も多く、D₂類と共に灯明皿の中心をなす。D類は、14cm以上の資料が極端に少なく、タール痕は原則としてない。また胎土も他に比べて良質であり、灯明皿としての用途をもっていないと考えられる。それに対して14cm未満のD₁類は約半数にタール痕や油痕をもち、使われ方も激しい。口径からは3寸5分と4寸に集中する。したがって、口径の上ではC₁、C₂、D₁、D₂類が相互に補完する関係にある。一乗谷においては、一般的に見られる傾向で、おそらく、A、B、E、F類は灯明皿用として、C類は酒杯、灯明皿として、D₁類は灯明



挿図3 土師質皿法量図

皿、酒環、盛皿等に、D₂類は酒環、盛皿等に用いられたらしい。

土釜 第10図34、35 土師質の羽釜で粘土帯3～4段の積上後、手づくねで整形、羽を貼りつけている。口径は比較的小さく10cm前後のものが多く、数は少ないが、一乗谷では各地点で必ず出土する遺物である。

瀬戸焼、美濃焼 P.L.8 第10図36～41

天目茶碗は法量の上から口径8～9cmのものと11～13cmのものがあり、図示したのはいずれも後者である。器形はいわゆる「天目形」で、口縁のくびれが強い。軸は古瀬戸軸と呼ばれる鉄軸で、まれには灰軸のものがある。高台は削高台で、つけ根にもへら削りの段をもつ。高台内は丸く削るもの(36)と平坦に削るもの(37、38)とがあり、高台畳付には3つの目跡を残すのが普通である。瀬戸、美濃製品の中では量的に多いものである。鉄軸を施した製品では、他に舟徳利形の壺(39)をはじめ、茶入、合子、小皿等があるが、いずれも小破片であった。

灰軸を施した製品には、碗、香炉、鉢、卸皿、片口の鉢、瓶子、皿等が出土している。碗には線刻の細い蓮弁文をもつ例や無文の例があるが、これらは第11図42、44のような青磁碗の写である。いずれも高台内により土の跡を残す。香炉(第10図40)は、東隣屋敷より出土した例で、口径9.5cm、器高6.0cm。粘土を貼りつけて3足とし、胴には3本の沈線をもつ。全体に灰軸がかけられているが、火を受けている。本例は一乗谷で最も多い香炉であり、碗同様に青磁香炉の写である。41は灰軸の端反皿で、灰軸製品の中では最も多く、見込に菊花やカタバミの印花をもつ例もある。卸皿は浅い開いた皿の見込にへらを用いて、縦横に卸目を入れたもので、口辺付近だけ灰軸をかける。片口をもつ鉢の卸皿もある。

中国製陶磁器

青磁製品 P.L.9 第11図42～47

碗は、蓮弁文をもつものをⅠ類、無文のものをⅡ類とした。Ⅰ類中、浮彫の蓮弁をもつものが9点、線刻の剣先形の蓮弁をもつもの(42、43)が47点ある。Ⅱ類には、直口で口唇直下に沈線をもつもの5点、もたないもの5点、端反で外面青磁釉、内面白磁釉で、口縁下に染付の単線をもつもの1点がある。さらに底部だけの破片が9点あり、見込に印花文をもつ。高台内は中心を残して丸く釉がふかれており、その部分に荒い砂質のより土の跡を残す。畳付にも釉がかかる。

皿は3類に分かれる。Ⅰ類は、輪花皿で萼筒底をもつ。破片から推定すると5弁と思われ、砂敷の跡をもつ。16点を認める。Ⅱ類は、稜花皿で、46他17点を認める。口縁はゆるく外反し、稜をなす。見込が広く、腰の稜が特徴。内面には口縁に沿ってへら切りの条線や渦文をもち、見込に印花をもつ例もある。Ⅲ類は菊花皿で2点を認める。これにはゆるく内湾する丸い花卉をもつ例と、へらによって口縁を切り、沈線で粗略な花卉を引いた例(47)とがある。一般には前者が多く、「天下太平」等の染付の銘をもつものもある。

白磁製品

第11図48～50

白磁製品の主なものは小形の皿で、48～50にあげた3種と萁筋底の器形がある。48の端反の皿が最も多く、口径は11～12cmに集中する。全体に粗略な作りで、釉調も半ツヤ消状の灰色に近いものが多い。49は高台脇に段をもたずに外反して口縁につづく皿で、内湾する50と共に比較的少ない。

染付製品 P.L. 8、9 第11図51

染付には、碗、皿、鉢等があり、中でも前2者が多い。染付碗では口縁部外面に波文帯、胴にパシヨウ文のくずれたもの、見込に花卉の尖った花文をもつ例が10点認められる。口径と器高が2:1に近く、標準的な比率らしい。同じ器形の碗で、外面に飛鳥と雲文を3単位配し、見込にも同じ雲文をもつ例(51)があり、高台内には、くずれた筆で「万福攸同」の銘をもつ。この碗は「新馬場」の井戸(S.E. 292)と、「ショーゲドン」の暗渠(S.Z. 270)から各々1個体ずつ出土している。新馬場からは、この他にも端反で外面に唐草文、見込に大きく、「福」を書いた例もある。この碗の割れ口には、漆で接着した痕跡がみられる。

染付皿には、萁筋底をもち、弱く内湾気味の口縁をもつ皿と、高台をもつ端反の小皿とが顕著である。前者は、口縁部に波文帯又は、そのくずれた列点文帯をもち、胴部にはパシヨウ文のくずれた文様をもつ。後者は、外面に宝相華唐草文をめぐらし、見込には、意匠化された花文をもつ。これらはいずれも10～12cmの小皿で、少し大きい端反皿では、見込に獅子文をもつ例がある。

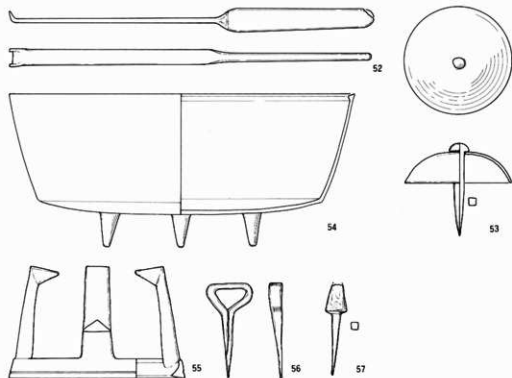
染付製品のこうした特徴をみると、これらが、陳柏泉1973等に言われる中国明代嘉靖期の景德鎮系の民窯の製品と推定され、当時、日本や南方に大量に輸出された品々であると考えられる。

緑褐色釉壺 第8図7

口径11.5cm、底径11.5cm、復原高約32cmで、底は丸くあがっている。3cm程の低い頸はゆるく立ち、折り返された口縁はへらで面取りされている。首から肩にかけて、一段の段をもち、ナデ肩である。内面には巾1.2cmのロクロ痕を明瞭に残し、反時計回りに回転している。全体に緑褐色の釉が流しがけされており、ムラが多い。腰からは露胎と思われる。耳の有無は不明。いわゆるルソン壺系の「底入」と呼ばれる葉茶壺と推定される。

金属製品 P.L. 8、10 挿図4

金属製品で最も多いのは鉄釘やかすがいといった建築用の材料であり、中でも釘が多い。鉄釘はいわゆる「和釘」と呼ばれる鍛造のもので、身は断面が4角形、頭部は扁平にたたいた後に曲げられている。錆による腐食が激しく、原形をとどめないが、およそ5～6cmのものが多い。56は壺金で、全長5cm、頭部巾2.5cm、内径1.6cmである。厚さ0.3cmの鉄片を2つ折りにして作られている。53は饅頭金具で、かさは銅製、釘は鉄製である。いずれも火を受けている。



挿図 4

新馬場出土の金属製品

直径5.7cm、高さ1.6cmで、厚さ0.1cmの銅板をたたいて作られている。釘は頭を丸く作り、断面も上半は丸く、下半は4角で、専用に作られたものだろう。

鍵(52)は鉄製で、鍛造である。本館の井戸内から出土した5本の鍵の2本が、U字形の先端をもつが、本例もU字形をなす。全長19.5cm、先端巾1.0cm。

鉄鍋(54)は鑄造で、棒状の3足をもつ。破片のため耳の有無は不明である。腰で屈折して、底部が広く作られている。同じような鉄鍋がもう1点出土している。

五徳(55)は鑄造で、断面3角形の3脚をもつ。先端の爪はゆるく内傾し、脚間は14.3cmを計る。基部の輪は直径18.5cmである。

金銅製盤(PL. 8)は底径13.0cm、残高3.5cmの銅製の盤で、口縁を折っている。この部分には細かく雷文が鑄出している。強い火を受けて部分的に融けて歪んでいる。

鉄鏃(57)は、全体を丸く整え、先端のみ先形に合わせた頭部をもつ、いわゆる「のみ根」にあたるもの。茎は断面0.4cm×0.4cmの先細りの角棒で3.4cmを計る。のかつきから計ると矢柄は直径0.8cmと推定される。

挿図4の中、56と57を除くものは、いずれもⅢ期の井戸(SE 292)の底部より出土した一括遺物である。

石製品

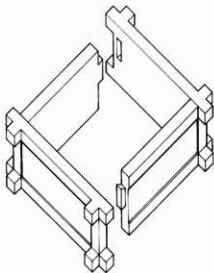
石製品の中では、福井で採れる火山礫凝灰岩を材料とした製品が多く、建築材から日常雑器に至るまでその用途は広範である。

火炉 どの地点からも数多く出土する行火の1種で越前では「バンドコ」と呼ばれている。平面形から2種類に分けられる。平面D字形でその直線部に5～6窓を切ったものと、平面O字形で、その1方の長側面に窓を切ったもの、又は、蓋に窓をもつもの等がある。前者は、窓をもつ辺の長さが20cm程度のもが多く、後者は長径23～24cmのものが多い。深さは共に15cm前後である。

鉢 内面のみを整形したこね鉢のようなものと、全体にていねいな作りで、4足又は3足をもつ盤状のものがある。後者には、平面形が長四角のもの、楕円のもの、円形のもの等があり、縁先に置かれた盆栽用の鉢と考えられる。

井戸枠 挿図5、6 火山礫凝灰岩製で、4枚の側をほぞで組むように作られている。全体の形は、角材の井桁に側板をつけた木製のものを写しており、一乗谷では多くの井戸に用いられている。高さは2尺に近いものが標準で、長さは、井戸の直径に近似する。

火山礫凝灰岩以外の製品では硯、茶臼等があげられる。これらは皆、特殊な用途のために、製品として完成した品々もたらされている。特に硯は貴重であったらしく、欠けた縁を漆で接着した例も認められる。



挿図5 ▲
井戸枠復原図

挿図6 ▶
新馬場出土井戸枠



第12次発掘調査 (石田利夫宅現状変更地)

第12次調査は、福井市城戸の内町字瓜割流13-34-1・2・3・4・35の家屋新築に伴う現状変更申請地の事前調査で、調査面積は約108㎡である。昭和49年7月8日から7月12日の4日間調査を行った。

当現状変更地は、瓜割清水の北西20m本館外郭より北東200mの地点である。

発掘された遺構 P.L. 11 第12図

検出した主な遺構は、礎石建物1、小砂利敷面1、桶3等である。

礎石建物 (S B 360) 発掘区のはほぼ中央北東へのびる礎石列が検出され、それに伴う、数個の礎石も検出した。発掘面積が狭いため、北側が、はっきりしないが、南北8m(4.5間)×9m(5間)を測る。使用されている礎石は、小ぶりである。S B 360内には、小砂利が、不規則に散らばっているが、はっきりとした石敷にはならない。北隅には石敷がある。礎石建物S B 360内に深さ約60cm直径約1m程のピット内に桶が2個検出された。ピット内の桶は、残りが良く、出土状況から新しい時代のもので推定された。S K 364には、桶はなかったが同様のものである。

その他、石列S X 361に北を限られるような状態で、小砂利敷S X 362が検出された。

出土した遺物は大部分が細片であったが、これまで調査されて来た所から出土した遺物と変らない。

第14次発掘調査 (浄覚寺防火用水) 現状変更

第14次調査は、福井市城戸の内町庄角23-1の防火用水建設に伴う現状変更地の事前調査で、調査面積42㎡である。昭和50年10月22日から10月28日の6日間調査を行った。

当現状変更地は瓜割清水の北東70m、本館外郭より250mの地点である。

発掘された遺構 P.L. 11 第12図

発掘区のは中央で、東西へのびる石組溝(S D 378)を検出した。この石組溝は、発掘区東端でとじており西に流れていたものである。長さ5m巾30cm深さ25cmを測る。

発掘区北西隅で井戸(S E 379)を検出した。この井戸は、上面がくずれていたのと出水がはげしかったので、底まで掘り下げていない。上端の直径は約1.2mである。この井戸と、石組溝S D 378の間で石敷(S X 380)を検出した。小児頭大で表面の平な石を敷きつめたものである。この石敷は、井戸と石組溝に伴うものである。なおS D 378より北側は砂利まじりのしっかりした遺構面であった。発掘区南端で礎石らしい石が2個検出され、そのうち東側の石には柱をたてる位置を示す十字の線刻が施されていた。規模は全く不明である。

第13次発掘調査 (通称中の御殿跡)

昭和47年度の第4次調査では、南半分だけの調査のうえに、後世の削平も著しく、十分ではなかったが、中の御殿は朝倉氏一族の屋敷跡と考えるのが妥当であること、3期にわたって造営および建直しされていること等が判明した。今回の調査は、中の御殿の全容を明らかにすること、中の御殿跡と湯殿跡を隔てている空濠を調査し、その連絡路を検出することに主眼をおいた。調査面積は約2,250㎡で、昭和49年8月11日より昭和50年3月24日まで調査を行った。

発掘された遺構 P L. 12、13、14、15 第13、14、15図

今回の調査で検出した主な遺構は、前回の調査に連なる遺構も含めて、土塁1、空濠2、礎石建物1、石組溝8、石組水溜1、石垣1である。遺構の残存状況は前回の調査同様、土塁裾付近では比較的良好であったが、中央部や北空濠S D 366付近では後世の削平がはなはだしく遺構の規模や性格は不明な部分が多かった。

土塁 (S A 201) 中の御殿の東を限る土塁で3段よりなる。全長約42mのうち、残り北半分22mを発掘した。北半分の土塁上段の中は最大で4.7mで、平均3.5mである。最大巾は北端近くにある。高さは土塁基底部から上段まで8.2m、中段まで5.8m、下段まで3.4mを測る。上段及び中段は北側に向かって傾斜しており、下段は土塁登り口に連なっている。

土塁中央部では、中段と下段は地山を削り出して造っているが、上段は盛土によって築かれている。しかし、北端から3m程までは、地山が下っていて下段中程から盛土で築かれている。盛土部の崩れを防ぐため土塁北端部には石垣が築かれている。この石垣は半分以上崩壊しているが推定復原すると、北面で高さ3m、長さは基底部で9.2m、上端で5.2m、西面で高さ3.5m長さ5.5mになる。東面は発掘していないが、7mはのびているようである。

また、土塁西面の石垣南端部と、南から続いて来た上段内側裾部の石垣北端部は50cm程ずれしており、さらに、西面石垣の南端基底部は、土塁上段裾部より2石分下方へ入り込んでいる。

中段は北隅の所で中の御殿平坦面まで斜めに下りて来ており、このスロープが、中の御殿から中段へ登るための登り口だったと考えられるが、石段らしきものは検出できず、あるいは斜面のままの登り口だったかもしれない。

土塁中段の南半には掘立柱穴列 (S A 217) があったが、北半分では注意して調査したにもかかわらず、何も検出できなかった。

空濠 (S D 218) S A 201の東側に掘られた空濠で、湯殿跡と中の御殿跡を隔てる空濠S D 366に接続する。巾約5m、深さ3mのV字状の空濠である。S D 366に接続する北端部と南中程の一部だけの発掘ではあるが、全体としては素掘である。しかし、土塁北端と東岸盛土部には石垣を築いていたらしい。S D 366に接続する所は、S D 218が浅くて約1mの段がつく。

石組溝 (SD 320) SD 204、SD 205、に続く南北溝で、東土塁裾を北に流れて北空濠SD 366にそそぐ。SD 320の南端 (SD 205と接合する所) に1m×0.7m、深さ0.5m程の石組水溜 (SF 369) がある。この四隅には上面が平な礎石のような石が使用されている。SD 320とSD 205にSD 204が弓型に取り付いているが、前回の調査で判明しているように、土塁SA 201の一部が崩れたあと、SD 205を壊して埋め、SD 205に使用されていた石をSD 204の新しく造った部分の西側だけに転用したものである。

石組溝 (SD 206) 南端部は前回の調査で検出されていたSD 206は庭園の池SG 212から北へ流れ出て、北よりの所で東に曲ってSD 320にそそぐ石組溝である。この石組溝は礎石建物SB 208の下層で検出された。土塁中央部下段が崩壊した時、SD 206、SD 207、SD 205が同時に埋められ、SB 208が造営されたものと考えられる。

石組溝 (SD 372) 一部しか残存していない南北石組溝で礎石建物SB 208に伴う雨落溝と考えられる。巾30cm、深さ30cm、残存長4.5mを測る。

礎石建物 (SB 208) 東土塁裾にそって中央より北側に建てられた南北15m (8間)×東西4.7m (2.5間)の礎石建物である。桁行方向は南北で柱間寸法は1.875m (6.19尺)と推定される。本館の主殿 (6.25尺) や会所 (6.2尺) の柱間よりも小さい。北半分は礎石の抜き取り跡も不明な部分が多い。西南隅で廊状建物SB 210に接続し、SB 208の西側庇は南に延び廊状建物SB 210となる。しかし、桁行方向の柱間寸法はSB 208が6.19尺に対して、SB 210は190cm (6.27尺) あり、ほぼ1寸の差がある。

SB 208は、前述のように石組溝SD 371を埋立てて造営されたものである。SB 208は中の御殿で規模が判明した唯一の建物であるが、他の建物が全くと言っていい程不明なため性格については推定しがたい。

石敷遺構 (SX 377) 中の御殿中央よりやや北に位置する石敷状遺構である。北側の東西にならんでいる小石群は敷石らしいが、南北列の一部の石は意識的に立てられている。またこの付近は他所に比して多量の灰が検出され、越前焼類が多く出土した。

石組溝 (SD 373、SD 374) 中の御殿西北隅近くで南北に流れ (SD 373)、西に曲って西北隅に流れ出る (SD 374) 石組溝である。SD 373は残りが悪く残存長12.5mのところ石組は約5m分しか残っていない。SD 374も残りが悪く、溝側石列はもともと2段になっていたが、東半分は崩れてしまっていた。SD 374は西側に向って急に傾斜しており、SD 373と接する付近では深さ30cm、巾40cmであるのに対して、西出口付近では深さ50m、巾50cmになっている。

石組溝 (SD 375、SD 376) 中の御殿西北隅を南北に流れてSD 374にそそぐ石組溝である。SD 375は溝巾30cm、深さ30cm、残存長8.5mを測る。もともと南に真直ぐにのびていたが、ある時期に北端から5.7mの所でカギの手に西に曲げられ、さらに南にのびようになった (SD 376)。これらのSD 373～SD 376までの石組溝に囲まれた部分には、建物が一棟建

っていたと推定され、これらの石組溝は、この建物の雨落溝だったのだろう。

石垣 (S V 368) もと中の御殿と新御殿とを限っていた石垣である。これがある時期に埋められ、中の御殿が西側へ北隅で6 m (南側は不明)程広げられた。石垣といっても人頭大の石を乱雑に積み上げただけのような造り方である。盛土をして中の御殿を造成した部分だけに石垣が築かれている。石垣の規模は巾が上端で3.5m、裾で1.5m、高さは6 mを測る。

S V 368の南への続きを確認するために、3ヶ所深さ1.2mのトレンチを入れたが、北西隅の石垣ほど明確な石垣はなく、自然石に少し手を加えたような状態であった。

なお、S D 374～S D 376は石垣が埋められ盛土して西側に拡張された後に造られたものであり、S D 373も、S D 374らと一連の溝であるから拡張後であろう。

空壕 (S D 366) 孝景墓所下付近から観音山の西裾を廻り、中の御殿と湯殿跡の間を通り本館南側壕 (S D 110) に続く空壕である。今回は中の御殿に接する部分約50mを発掘した。壕の底はかなりの斜面になっているため、三段に掘られている。規模は西端で巾15m、中の御殿からの深さは6 m、東土塁裾で巾10.5m、深さ2 mである。これより東側は観音山が南へせり出しているため巾7.5mと狭くなっている。

湯殿跡側は角礫凝灰岩系の割石で石垣を積みあげているが、中の御殿側はそれらしきものがなく、わずかに4石程残っている石と、二次的にころげ落ちた状態で出土した30数個の石があるいは北空壕側の一部石垣であったのではないかと推察させる程度である。

なお、湯殿と中の御殿とを連絡する施設があったか否かは今回の調査では検出できなかった。

また、東土塁付近の造営時期については前回の通りであるが、それと、S V 368が埋められて中の御殿が西に拡張された時期の関係については全く不明である。

発掘された遺物

出土した遺物には中国製の青磁、白磁、瀬戸、美濃の焼物、越前焼、瓦質土器、土師質土器鉄製品、石製品がある。

遺構の西北角近くが大きく削平されており、出土した遺物は量としてはあまり多くないが、舶載の磁器類が割合多く、中には優品も含まれている。なお第4次調査で出土した遺物もあわせて報告する。

中国製磁器

青磁碗 底部や破片だけなので碗と鉢の区別がつかない場合が多い。従って高台径が5.5cmより小さいものを碗とした。

P L.17-125は高台が小さく、外に大きく開く器形で、釉は青白色、薄手で作りもよい。釉は全体にむらなくかかっており、畳付だけ削り取ってある。高さ、口径は不明だが、本館出土の類品では、それぞれ6.7cm、14.6cmである。1点のみ出土している。宋代から元代に龍泉窯で製

作されたものであろう。

第16図-64は粗厚な底部を有し、腰から上はやや薄い、釉調はくすんだ緑で、高台内だけ露胎である。胎土は粗く灰色で、十分磁器化していない。見込みにには花尖に「大」字のある五弁の印花がある（P.L.17-126）。厚手だが作り焼成もよく、ややくすんだ緑色の釉調で、高台内だけ露胎で、重ね焼きの痕があり、見込みには印花がある（P.L.17-128）。

鎮碗 鎮碗の釉調は全体にオリブがかかったにぶい緑のものが多く、鎮の型から4つに分類できる。A類、蓮弁自体はやや不明確だが、蓮弁の中央が高くなっており鎮本来の形を残している。B類、蓮弁を別々にはっきりと描いてある。やや薄手で作りもかなりよい（P.L.17-127）。C類、蓮弁は口縁下に一条の波線を入れ、その下に刻線を入れたものである。やや厚手である。D類、蓮弁は、縦の線刻であらわすだけになっている。

鉢 高台部だけの破片ばかりであるが、やや薄手で作り釉調もよく見込みに吉祥字句の押印があって、高台内は露胎で重ね焼きの痕があるもの、割高台風になっているもの（P.L.17-131）、重ね焼きで見込目が露胎になっているもの（P.L.17-132）等がある。

青磁皿 大別して5種類の皿が出土している。A、やや厚手で、口縁は大きく外反する。釉は厚く、ややくすんだ緑色をしている。素地は灰色をしている。口径は13cmを測る（第16図-65）。B、形はAに似ているがやや薄手である。釉はやや厚く青みがかかった緑色で、素地は白色である（P.L.17-135）。C、厚手で、口縁部が体部中程から大きく外反する稜花皿である。稜花は一度普通の口縁を作った後でへらで丸く削り取って作っている。2個体出土している。口径は11cmを測る（第16図-66）。D、口径12cm程の小皿で、釉は白い粉がふいたように青く、薄手で作りはやや丁寧である。口縁部は端反りで、口端部は茶褐色に鉄が浮いている。E、Dとはほぼ同様な造りと釉調で、口縁部が少し内湾している（P.L.17-136）。

菊皿 次の4種類の菊皿が出土した。A、緑がかかった薄青い釉調で、口径が11.5cm内外、花弁の幅1cm内外である。釉は全体にかかっており、畳付は施釉後に削り落してあり、砂高台になっている。素地は、ほとんど白色である（第16図-67）。B、わずかに青みのある緑で細かい気泡のある釉調である。大きさその他の点もAにはほぼ同じである。高台内が白磁釉になっている点だけが異なる（第16図-68）。C、やや緑がかかった青い釉調で、輪花の幅が2.5cmと大きく、五弁らしい。底部は葎筒底になっている。畳付だけ釉を削り取ってある（P.L.17-142）。D、半透明で褐色の強い緑色をした釉で、小さい貫入が入っている。素地も鉄分の多い灰褐色である。一度丸い小皿を作った後に、へらで小さい輪花を刻み込んでいる（P.L.17-138）。D類だけが、胎土、作り、焼成等が他の形式と異なる。

青磁植木鉢 P.L.16-1、第16図-69は口径15.5cm高さ12.5cmの千鳥手香炉の形をした植木鉢で、口縁径が底部よりわずかに大きい。体部に二条の凸帯があり、その間に三本の算木状の凸帯が8単位入る。底には径1.2cm程の穴があいており、内底に鯉の印刻がある。緑がかって

いるが、砧青磁に近い釉が厚くかかっており、内外の底部だけ露胎である。青磁植木鉢には、蘭や石菖等が植えられていたのであろう。

その他、火を受けて焼けただれているが、砧青磁の管耳花生（P.L.17-139）、千鳥手香炉（P.L.17-141）、内に蓮花を作りつけた合子（P.L.17-140）等も出土している。

染付碗 細片が多く器形、絵とも全体が判るのは少ないが、本館出土のものから推定復原した。A₁（6個体）やや薄手で、腰部から丸く立ちあがる器形である。文様は青みの強い白磁に発色のあまりよくない呉須で描かれている。口縁部近くに帯状にくずれた草花文が入り、その下にも草花文が入る。内側は口縁部下に1-2条の横線が入る（P.L.18-143・145）。A₂、やや薄手で、少し青みをおびた灰色の白地に発色の悪い呉須で文様が描かれている。見込みに上弦の月と植物文が描かれ、外側口縁下に帯状に草花文が、その下にも草花文が描かれている。文様構成がA₁と似ており、描かれた文様だけが異なるのであろう。B（4-5個体）、薄手で、ほとんど真白か、わずかに青みがかった白磁で、内側口縁下の2条の横線内に格子状の文様を入れている（P.L.18-146）。Bには外側に暗花文が入ったものと、ないもの、口縁部が丸くおさまったものと、やや端反りになったものがある。また、外側口縁下に横線の入ったものもある。C（4-5個体）、白色に近いものから青みの強い白磁まであり、外側よりも内側の方が青みが強いようである。文様は口縁部近くの内外と高台脇に1本ずつ横線を入れただけである（P.L.18-147）。D（1個体）、やや厚手で鉢に近い器形である。青みの強い白磁に、発色のよい呉須で牡丹唐草文が描かれている。高台脇にはくずれた蓮弁文が回り、見込みに草花文が描かれていたようである（P.L.18-148）。その他、外側が網目になったもの、想像上の動物を描いたもの等が出土している。

鉢 粗厚で、青みをおびた白磁に青藍色の呉須で、見込みいっぱい大きな菊花が描かれている。この菊花は雲堂手の鉢に描かれているものと極似しており、破片のため雲の図柄はないが同じ系列に入れてよいものであろう（P.L.19-149）。明初期の民窯で焼かれたものと推定される。

小皿 A（10個体）、体部中程から大きく外反する口縁を有する。薄手で、少し青みをおびた白磁で見込みに重圓内に、十字花文がなれたタッチで描かれ、外側には唐草文が描かれている。やや大小があるが、口径9cm内外で高さ2.3cm内外である。高台には重焼した時の砂がついている（P.L.18-150）。B、Aとほとんど同じ器形であるが、見込みは十字花文ではなく、他の草花文が描かれ、外側も唐草文ではなく、草花文のようである。

稜花皿 口縁部が大きく外反した稜花皿で体部はへら削りによる稜をつけている。文様は、口縁部内側に、輪を三本線で連続しており、外側に輪を連続している。見込みに草花文が描かれている。

饅頭形の皿（7個体）、器形は内彎して斜上方に立ちあがり、口縁を丸くおさめる。底部の畳付だけ無釉である。底部内側の削りが悪く、段になってくいちがっているものもある。文様は青みがかった白磁に底部近くの外側に寿波文（P.L.18-153）をめぐらしているのが多い。

その見込みには菊花や草花文が入っている。外側にアラビア文字をくずした文様が入ったもの（P.L.18-152）、見込みに『寿』を図案化した文様が入ったもの等がある。

環 径 6.7cm、高さ 3.5cm程の小さな端返りの環である。外側に葉の長い草花が描かれている。高台内に『大明年造』の銘があるのが普通である（P.L.18-154）。口縁部近くの内側の3条の横線内に格子状の図柄が描かれているものもある。

その他、壺の蓋らしき破片も出土している（第14図-78）。これらの染付の多くは景徳鎮系の民窯で焼かれたものであろう。

白磁皿 口径12cm前後、高さ3cm程の皿が多数出土している。釉調は灰色のものからクリーム色をしたものまで様々である。やや広い高台を有し、体部のやや上で大きく外反する。畳付だけ釉が削り取られて露胎になっており、高台は砂高台である。（P.L.15-70、第16図-70・71）第16図-72は腰の部分は角ばっており、体部は斜上方に直線的に伸び、口縁部は外反する。

他に内面に印花を有し、乳白色の釉がかかった定窯の白磁と思われる破片も出土している。

菊皿 口径11cm前後、高さ3cm程で、高台内に『天下太平』の銘がある菊皿も多く出土している。蓮弁は小さく浅くて内外壁の中程までである。指で壁面を凹凸にしてから口端部をへらで波状に切って作ったものであろう。釉調はやや青みがかった白が多く、口端にはやや厚くかかっている。（P.L.15-74、第16図-73・74）。

環 第16図-76は厚手で釉調も灰色がかっている。口径7.5cm高さ2.8cmを測る。見込みは、重焼きのための円形の露胎部があり、外面は高台と寸以下が露胎になっており、へら削りによる稜がはっきりと残っている。第14図-75は桜高台を有し体部がゆるく内湾した皿で、口径9.5cmを測る。釉は乳白色で、胎土もやわらかい土で、磁器化していない。

赤絵碗 底部だけの破片である。高台は粗厚な造りで、丸味をもつ。胎土は鉄分を多く含んで、灰色である。釉調はやや緑がかっており、見込みに重圍の中に花を赤で、葉を緑で描き、焼き付けてある。外側底部近くには、赤い牡丹花のくずれた文様が4単位描かれている（第17図-79）。

高麗茶碗 しっかりした高台から、ほぼ直線的に斜上方に伸びる。内側見込みは平らな部分がなく、漏斗状になっている。高台内にははっきりした兜巾がなく、へら削跡が渦巻状に残っている。体部もへら削り跡の稜がある。畳付と見込みにトチ痕が残っており、両方のトチ痕の大きさが一致するので、同じ器形のものが重焼きされたのであろう。釉調は緑がかかった暗灰色である。胎土は黒く、精製されて細い（第17図-80）。

これら中国から輸入された陶磁器類は、一部の青磁碗、砧青磁の管耳花生等をのぞいて大部分の青磁や染付の碗、鉢、皿類、白磁の皿類は、『高雄観楓園屏風』にも描かれたり、草戸千軒町遺跡で多量に出土したり、日本各地の中世遺跡から必ずといっていい程出土することが示すように日常の喫茶や飲食に使用されたものであろう。

天 目 軸

天目茶碗 口径が12cm内外の普通の大きさのもの(12個体)と、口径7cm内外の小形のものがある。小形の天目茶碗(第17図-83・84・58)でははっきりしないが、普通の大きさの天目茶碗には、口縁下の返しが強くと体が直線的で高台内は丸く削ったものと(第17図-81・82 P.L. 15-81)と、返しが弱くと体が張り全体に丸みを持ち、高台内は平らに削ったものがある。釉調は黒褐色のものから茶褐色のものまでである。底部近くの露体部には渋釉がぬってある高台に三つトチの跡があるものもある。

小皿 径9.2cm、高さ2.3cmを測る小皿で、厚手である。内湾して立ちあがり、口縁は丸くおさめている。底部は萁筥底になっており、輪トチの跡がついている(第17図-87)。

灰 軸

碗 (4個体) 薄緑色の灰釉が全体に施されているが、高台内部はやや薄い。口縁がやや外反ぎみのもの(P.L.18-155)と、ほぼ直立したものがある。高台は削り出して厚くしっかりしている。高台内に輪トチの跡がある。

鎮手の碗 (1個体)(P.L.18-156)、蓮弁を線刻している。これらの碗は、青磁の写しである。

鉢 ややくすんだ薄緑の釉が、口縁から萁までかかっている。体部は大きく外に開き口縁部も外反ぎみである。口径15.5cmを測る。内側はほぼ平らに仕上げられているが、外側はロクロ目が残っている。ロクロは右廻りである。

菊皿 青磁をまねたもので、23弁の花弁を削り出している。やや厚手で、見込みには厚く釉がたまり、半透明の緑色をしている。高台内部には輪トチの跡がある。花弁が内側だけのものと内外対応しているものがある(P.L. 15-159)。

小皿 底部から少し内湾しながら上方に立ちあがり、そのまま丸くおさめる口縁(第17図-90 P.L.18-160)と、わずかに外反する口縁を有するものがある。内に4弁の印花があるもの、口径が小さく、口縁部だけ施釉したもの等がある。高台は削り出して、低く小さい。

茶入 やや厚手のいもの子形の茶入と推定される。薄黄緑色の釉が、上から号あたりまでは水平にかかっている。内側も同じ釉で、ロクロびきの指跡が残っている。底は糸切りである(P.L.18-91 第18図-91)。

その他、青磁千鳥手香炉のうつしも出土している(P.L.19-37)。

大形鉢 口縁部が水平に近く外反して、蓋がつくのであろうか、受部のような形になっている。口縁部の反りがそのまま受部のようにになっているものと、一度段を作って受部のようにになっているもの(P.L.18-158)と二種類ある。釉は内外とも中程までかけられている。その他おろし皿(P.L.18-164)も出土している。

祖母懷の葉茶壺 頸部が内傾して立ちあがり、玉造りの口縁がつく。肩はつよく張って、肩中

程に耳が四個つく。体部はあまり丸くなく、肩のやや下った所で最大径となる。やや内湾気味に下りて行き、底部近くになって急にせままる。内面は底部から肩まで、強くクロク跡をのこしている。胎土はよく精製されて細かく、焼成も良く露胎部は淡茶色を呈する。釉は刷毛で塗りつけてあり、均一ではない。おそらく瀬戸で焼かれたものであろう(P.L.16-92 第18図-92)。

これらの鉄種や灰釉陶器は美濃もしくは瀬戸で焼かれたもので、胎土はおろし皿をのぞいて白く、いわゆるもぐさ土である。おろし皿は無釉のせいか、胎土が異なり灰色で堅く焼きしまっている。

その他、備前焼きと思われる水指も出土している。底部径は20.5cmではほぼ垂直に立ち上がる高さは不明だが、24cm内外と推定される。外壁は横ナデを変化させて波状になっている。良く焼きしまっており茶褐色を呈する(第18図-93)。

出土した瀬戸・美濃製陶器のほとんどは、中国製の青磁や天目茶碗等をまねたものであり、その使われ方も中国製のものの変りなかったであろう。

越前焼

出土量も多く、各器種にわたっている。S X 377付近に集中して出土したが表土がほとんどなかったため、二次的に集められた可能性が強い。

壺A (5個体)いわゆるお街黒壺で、高さは15cm前後である。頸部から外反した口縁に片口がつくのが一般的である。肩はあまり張らず、肩部のやや下った所で最大径になる。体部は内湾気味に下りていく。底部は体部を途中で切断して作ったような印象を受ける。肩に二個所小さな耳が横に付く。縦に付く場合もある。頸部から口縁にかけては、それほど厚くないが、体部底部は、小さい器形の割に厚造りである。肩より下の部分には縦のへら削り成形の跡が見られる。肩にはへらがきの窯印がある。全体によく焼きしまっている(第18図-94)。

壺B (8個体)高さ23cm前後の小型の壺である。頸部は外反気味に立ちあがり、外側は中程がふくらみ気味である。肩はなだらかで、体部中央よりやや上に最大径がある。底部へはわずかに内湾気味に下りていき、底部がややしまったものと、大きめのものがある。大ききの割に器壁は厚い。口縁から肩にかけては横ナデ調整、体部以下はへら削り成形されている。内部も口縁から底部近くまで横ナデ調整されている。肩部にへらがき窯印がある(第18図-95)。

壺C (2個体)高さ23cm内外の小型の壺で、短くほぼ直立する頸部で、それに続くなだらかな肩を有する。体部中央よりやや上で最大径となる。他の例からすると、わずかに内湾して底部に下る。体部はへら削りによる成形がほどこされ、器壁はやや厚めである(第18図-96)。

壺D (12~3個体)高さ40cm内外の中型の壺である。口縁部は断面が三角形をなすもの(第18図-98)から、稜をとって丸味をもたせたもの、口端部を外側へ折り曲げただけのものまで差がある(第18図-97)。肩は大きく張り、他の事例から肩部中程に四個の耳を有するものがある。口縁部から頸部にかけては横ナデ調整、内面も同様で、肩部の粘土継目から下は、横ナデ調整を

施していない。肩部から下は叩きしめ成形している。

壺E 高さ40cm内外の中型の壺で、口縁部は頸部から連続的に大きく外反し、口端部は丸い。

甕A (4個体)高さ50cm内外で口径の大きい中型の甕である。断面三角の厚く短い口縁を有し肩は大きく張り、肩に最大径がある。口縁部は内面外面とも横ナデ調整され、外面の肩から下は叩き成形である。底部近くはヘラ削り成形している(第19図-101)。

甕B 高さ41cm内外でやや外反して立ち上がった口縁の、内外に一条の横線が入る。肩はなだらかで、体部中程よりやや上に最大径がある。体部はやや内湾して、小さい底部が付く。底には、藁の編物をしいた跡がある。口縁部と肩の内外面には横ナデ調整が施され、体部から下は叩き成形され、底部近くはヘラ削り跡がみられる(PL. 16-100)。

播鉢 小さな底部から斜上方に、ほぼ直線的に開く。口縁部は端をカットして稜をなすもの(第19図-102)、またカットした後をナデたものもある。口縁内面直下に凹線が入る。底部から上へ8条~12条の播目がほぼ全面に施されているもの、一つ間隔で施したもの等がある。器形に大小があり、口径40cm内外のものと30cm内外の2種類がある。浅鉢に播目のついたもの(第19図-103)もある。播鉢は、1~2の例をのぞいて全体に焼きがあまく淡い褐色をしており、長期間使用のため底部近くの播目が濡りへっている例もある。また量的にも多く27個体出土している。

鉢 口径32cm、高さ15cmの深鉢で、底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部近くで大きく内湾する。口端部は平らに内側に稜をなす(PL. 16-104, 第19図-104)。播鉢と同じ器形でただ播目がないだけのものがあり、これには片口がつくものもある(3個体)。

浅鉢 (2個体)口径20.7cm、高さ6cmの浅鉢で、底部から内湾しながら立ちあがる。厚手で、内外面は横ナデ調整され、赤褐色に焼きしまっている(PL. 16-105, 第19図-105)。

中の御殿跡から出土した越前焼は、これまでの調査で一般的に出土した器形のものばかりで16C後半に位置づけられる。

土師質皿

土師質皿はほぼ全面にわたって出土しているが、土壘下の流土中、北空壕から多く出土した。中の御殿からは次の四種類の他、耳皿、蓋が出土している。

A類 (第19図-106-107)小形のD類の底部を下から指で突き上げたものである。小さい底部から斜上方にやや外反して、広がるように伸びる。内面と外面口縁部近くに横ナデの跡があり、外面の横ナデにおされて口端部が、わずかに内湾さみである。丁寧に作られている。

B類 (第19図-108-110)、いわゆる手ずくね土器で、丸い粘土板の囲りを手でもちあげた後、特に調整を施していない。従って口縁部、器壁は起伏に富んでいる。底部から内湾して立ちあがっている。口径は8cm前後のものが多い。A類と共に灯明皿に使用した痕は見あたらない。

C類 (第19図-111-113)、丸みを持った底部から斜上方に伸びる。内面全体と口縁部外側にナデ整形がなされている。口端部は外側の横ナデ整形が強いため、わずかに内湾もしくは持ちあがっ

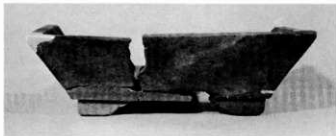
ている。やや厚手で、口径は9cm前後に集中する。灯明皿として使用されたことを示す灯心痕があるものとなないものがある。

D類（第19図、20図-114～117）平らで大きい底部から斜上方に外反ぎみに広がる。内面立ちあがりと口縁部外面に横ナデで調整が施され、この横ナデ整形が強いため底部と器壁の境に段がつき、口縁部外面にも段がつくものが多い。灯心痕があるものとなないものがあるが口径の大きいものほど、灯心痕のない割合が高く、16cmをこえるものには灯心痕が全くない。使用方法が全く異なるのであろう。他に耳皿（第20図-119）と土師質小壺、その蓋（第20図-118）高杯が出土している。耳皿は円い粘土板の周りをほぼ直立させて蓋をつくり、さらに2箇所を強くつまんでひしがしたものである。

中の御殿から出土する土師質皿の各類の数量的比率は、C・D類が圧倒的に多いが本館、他の武家屋敷跡に比較してB類の割合が高い。

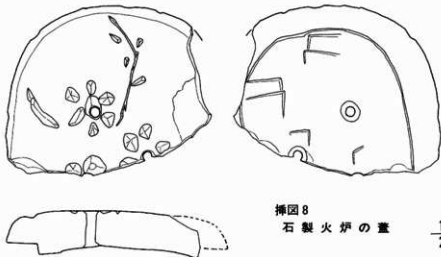
石製品

石製品は、火炉・盤・茶臼等が出土し、茶臼をのぞいてすべて火山礫凝灰岩製である。盤は4個体出土しており、挿図1は深さ10.5cm・巾29cm、上に開いている。四隅には削出しの足がついて



挿図7 石製盤

おり、表面にノミ痕を残さない。ほぼ同じ深さで楕円形の盤も出土している。これらの盤類は盆栽に使用され、縁側等に飾られたものであろう。



挿図8
石製火炉の蓋

$\frac{1}{2}$

環 境 整 備

昭和49年度は、請負事業で蛇谷地区1350㎡、民家立退地1285㎡を芝張などで整備し、休養緑地を造成した。また昨年度発掘整備した館跡北側外濠に、館跡庭園を經由して給水するため、蛇谷川から取水する工事を行った。次に武家屋敷跡の遺構を保存展観するため、第10、11次発掘調査地区3150㎡を砂利敷舗装などで整備した。なおこの地区と一乗谷川東側の中の御殿跡、蛇谷方面の遺跡を結ぶ見学ルートを考慮し、一乗谷川に遊歩橋を架設した。

直営事業では、一乗谷に在来の草本を育成保存するため、2,250㎡のアザミを主とする草園を造成した。また委託事業で、発掘調査と環境整備の資料にするため、八地谷地区55,400㎡について、200分の1の地形図を作成した。

蛇谷地区整備工 P.L. 19

蛇谷地区には、朝倉氏の屋敷跡と思われる、平坦地が階段状に残っており、斜面の一部には石垣が築かれている。また所々に植林されたスギ林があり、樹下にはシヤガが繁茂している。シヤガの群生地はそのまま保存することにし、草本や以前に伐採されたスギの根株などを抜



挿図9 環境整備地区図

根して、新しい山土を5cm厚に盛土、高麗芝を植栽した。また芝生地の要所に觀賞用に、ヤマブキ・コデマリ・ユキヤナギ・ハギなどを群植した。なお平坦地のふちに、サツキ・ツツジ・ジンチョウゲを、1㎡3本の割合で二列に列植した。

斜面の石垣は、写真測量を行い記録し、崩壊のおそれのある部分については、写真測量図などを参考に、表込に栗石を入れ、空積で補修復原した。補充石は現地のもを使用した。

中の御殿跡と蛇谷の間には、朝倉氏時代の道路遺構の存在が推察される。発掘調査の結果と一部露出している道の両端の隅石などから、道巾は約3mと推定される。これを園路として利用するため、現地盤上に砕石を敷き詰め、排水のため内径25cmのボラコン排水管を埋設した。その上に山土(粘質土)0.4㎡にセメント40kgの割合で混合したものを10cm厚にしきならした。さらに細砂利を一層しきならし展圧した。園路が県道北中足羽線に接するところには、勾配が急なので、玉石積の階段を設けた。

民家立退地整備工 P.L. 19

館跡北側の民家が立ち退いた機会に、その周辺を環境整備することにした。

昨年度発掘整備した館外濠の北側は、60cmほどに盛土して高麗芝を植栽した。また県道に近接して朝倉氏遺跡現況説明板が建てられていたが、館跡東側山上からの眺望にさしつかえるので、民家が立ち退いた所に移設した。その前面には、一度に大勢の見学者に遺跡の説明などができるように、砂利敷の広場を設けた。また民家で使用していた礎石を、ベンチのかわりに広場の北側に配置した。芝生地と砂利敷の境界石には小玉石を使用した。なお広場の周辺には、四季折々の木の花が觀賞できるように、ユキヤナギ・コデマリ・ヤマブキ・ハギなどの群植、アジサイの列植を行った。また緑陰を得るため、ケヤキ・サクラを要所に単植した。

濠 溝 水 工

蛇谷の小川から取水し、中の御殿跡東側、湯殿跡庭園東山裾間は給水パイプを埋設、館跡庭園からは館内排水路を使用して館外濠に給水できるようにした。

給水パイプは外径89mmの硬質塩化ビニル管を用いた。パイプ埋設のための溝は、深さ10cm～15cmとし、遺構保存のため掘削が表土(腐植土)内にとどまるようにした。泥溜用の構は、将来湯殿跡庭園池に貯水する際容易に利用できるように、庭園滝石組上方に一個所、そのほか中の御殿跡南側の園路延長部と湯殿跡南側空濠の上方の二個所に設置した。取水橋には、給水調節のバルブとゴミ流入防止のための金網のフィルターを付設した。

武家屋敷跡整備工 P.L. 20、第21回

武家屋敷跡の建物遺構はよく残存していなかったが、巾4mの街路とそれに沿って、側溝や4つの屋敷跡が発掘されたので、それらによる街並がわかるように環境整備した。

屋敷を区画する土塁跡は、石垣の上に山土を30cm厚に盛土し高麗芝を張り整備した。巾や位置は正確に復原されているが、高さは不明確であったので、石垣の上部は完全に復原されてい

ない。なお土塁の石垣は、前に倒壊したままで旧位置がわかる石の修復や、崩壊を防ぐための必要最小限な補修にとどめた。遺構道路は、細砂利敷舗装で表示した。溝は側石を補修し、底を5cm厚のモルタルでかためた。

掘立柱建物跡は、縁どりに茶色のアスファルトブロックを使用、内部には5cm厚の砕石基礎に10cm厚でソイルセメント舗装を行った。ソイルセメントは、山砂0.3m³にセメント40kg、土壌凝固剤ソイラーPを1kgの割合で加え混合したものである。掘立柱の柱位置には、長さ60cm、1辺15cmのヒノキの角材を据えた。東側の横跡の柱位置には長さ60cm、1辺12cmのヒノキの角材を地中に20cmほどに埋込み、また雑木の横跡には、出土した柱根と同じ材質の長さ70cm・長径12cmの栗の丸太材を深さ30cmほど埋込み据えた。ヒノキ・栗材ともに木肌の表面に防腐剤のウッドエースを塗付した。

礎石を用いた建物跡には、縁どりに黒色のアスファルトブロックを使用、内部には基礎の砕石の上に5cm厚でアスファルト舗装を行った。

井戸枠は、出土した井戸枠片を参考にし、同じ材質の火山礫凝灰岩(笏谷石)で復原三基設置した。高さ57.2cm、内のり120cmの大きさである。

建物跡・道路・土塁・溝・井戸・石組施設などのほかの部分は、並砂利を8cm厚にして舗装した。また発掘した北側の屋敷の一部、南側の屋敷の一部には砕石を敷いて区別した。

遺構のないところには、赤松・ヤマザクラ・ヤマモミジ・ケヤキなどの高さ4.5m内外の高木を単植した。植栽は直径3mの円錐状に盛土して行った。盛土の裾には玉石を並べ、斜面には高麗芝を植栽した。

遊歩橋工 PL. 19

土橋風の、巾1.9mの遊歩橋を造成した。橋桁には、H鋼(250×250×9×14mm)を使用した。長さ5m・6m・6mのものをボルトで固定して用いたが、デザイン上中央のH鋼を橋台の天端より10cmほど高くして据えた。その上に、10cm内外のスギ丸太を厚さ7cmに製材したものをしきならべ、12cm角のスギ材でおさえた。丸太にクレオソートを塗付し、その上に砕石を一層しき、さらにソイルセメントを12cm厚にしきこみ細砂利を散布展張した。

現在の玉石護岸をこわさないように掘削し、基礎に栗石を20cm厚に入れ、コンクリート製橋台(2×0.9×0.5m)を構築した。橋脚は、厚さ15cmに製材したスギ端太材を用い、H鋼にボルトで固定、6mの間隔をおいて二基設置した。

草園造成

武家屋敷跡の範囲の表示と、在来植物の育成を目的として、10・11次発掘調査地区の北方に草園を造成した。

屋敷の境界には、ハギを2m間隔で2列に列植した。内部には東側半分にあざみを、西側にシャガ・チゴザサを植栽した。また西北よりに、66m²の芝生の体憩緑地を設けた。

石造遺物の調査

昭和47年・48年・49年の3ヶ年にわたって、一乗谷所在の石塔・石仏の第一次予備調査のあらしみを行なった。未だ谷の各所に幾つかのものが残存しているものと思うが、一応、表面に露出したものについては、ほぼ全体的個数の把握は達成されたものと思う。その結果、総数2,820体を確認した。

確認した総数2,820体の石塔・石仏の内訳は、大別して、約半数が一石五輪塔(1,457体)で、約3分の1(1,036体)がいわゆる像をもった石仏であった。像では、地藏菩薩の556体が圧倒的に多く、以下、阿弥陀如来86体、観音菩薩(聖観音・十一面千手観音)61体、如意輪観音37体、不動明王16体とつづいている。

板碑が86体あるが、そのほとんどは、五輪塔二体を線刻したものである。石仏には、その他に、釈迦如来・虚空蔵菩薩・制吒迦童子・矜羯羅童子・妙見菩薩・大日如来・天部等が少しあった。

石塔は大部分が一石五輪塔で、組合せ五輪塔(148体)、宝篋印塔(44体)は比率から言えば極めて少ない。未だ調査登録していないが、他に層塔が二基あると考えられる。

これら約3,000体の石塔・石仏は、一乗谷に散在しているのが現況だが、やや細かく分析すると、所在に地域的な偏りが認められる。これは、この谷の城館或は城下が、既に武家町・寺町という機能的な区分をもって形成されていたのでないかということ窺わしめる。

石材は99%のものが、火山凝灰岩(笏谷石)で安山岩のものは稀で10体を数えるのみである。大きさは、一石五輪塔では巾15cm～20cmのものが大部分で、最大のもので巾23.5cm、最小のもので巾11cmである。一尊石仏の場合では巾20cm～35cmのものが多く、二尊石仏の場合では巾30cm～60cmとなるが、概して小型のものが多い。

石仏の外型は、小型石仏の場合、圭頭庇付と舟型光背に分けられる。一尊の時には、その比率は顕著な差はないが、複尊では、ほとんどが圭頭もしくは圭頭庇付であって、舟型光背は稀である。二尊石仏の像の種類は、阿弥陀と地藏の組合せが多く、以下、地藏と地藏・地藏と如意輪・阿弥陀と観音・阿弥陀と釈迦・阿弥陀と阿弥陀等の組合せがある。これからも、やはり阿弥陀・地藏・観音に対する信仰が顕著に見られる。

これら石塔・石仏で銘の判読可能なものの内、法名としては、禪門(禪定門)・禪尼(禪定尼)・童子・童女・大姉が多く、これは、被葬者・被供養者が一般俗人であったことを示しているものと考えられる。五輪塔・小型石仏の場合、五輪塔1体、或は尊像1体に対応して、銘が刻されていることが多い。従って二尊石仏であれば銘2つの場合が多い。

紀年銘については、①一石五輪塔(五輪塔・宝篋印塔)、②一尊石仏の単数銘、③単尊の複数銘のもので、法名・紀年銘の対応しているもの、④小型板碑の場合には、年月日は、没年月

日であると考えられる。又、総高1mを越す大型石仏・特殊なもの・逆修の場合には、供養年月日が刻されているものと思う。

約3,000体の石塔・石仏の3分の2は、天台宗真盛派であったとされる西山光照寺・盛源寺・法藏寺・極楽寺・最勝寺跡に伝存するが、確認できる法名1,215名の内、約1割が、「真」「盛」の字を法名に使用している。これも又、この谷の石造遺物の重要な担い手の1人が「天台宗真盛派」であったことを示している。

紀年銘は、朝倉氏が一乗谷に在城したとされる文明年間から、織田信長によって滅亡させられる間の百年間の文明・長享・延徳・明応・文亀・永正・大永・享禄・天文・弘治・永禄・元亀にあてはまるものが全てである。このこと自体、この谷の石塔・石仏が朝倉氏と一体不可分のものであったことを示しているが、特に天文（1531年）以降、その数は急増している。

決して十分な調査とは言えないまでも、一応表面に露出しているもの総個体数の概要を捉み得たこと・朝倉氏と一体不可分のものであること・宗派の輪郭・年次別分布・種類の概要を捉み得たものと思う。尚詳細については、別に「一乗谷石造遺物調査報告書Ⅰ—銘文集成」を公刊するので、それにあたられたい。又、調査の全個体についての台帳は当研究所に保管してあるので併せてご覧頂きたい。（尚、「銘文集成」は、肉眼による調査台帳を基礎に作成し、未だ写真・拓本との整合を行い得ないので、若干の誤記を生じているかと恐れるが、当面、ともかくも一応を報告し、後日を期したく思っている。）

以下に今後の問題点を列記しておくたい。

1. 一乗谷の石造遺物造立の重要な担い手が、「天台宗真盛派」であることが今回の調査では判明したが、朝倉氏自身はやはり「禅宗」だったと考えられる。戦国大名が複数の宗派を信仰するのは特に珍らしいことではないだろうが、事実この関係はどうあったのだろうか。
2. 朝倉氏は越前を領国とした戦国大名であり、一乗谷はその居城であるが、一乗谷に集中的に残る石塔・石仏は、一乗谷だけの特徴なのだろうか？或は越前一国の在々所々にも石塔・石仏は分布しているのか？その場合、均質に分布しているのか？分布に偏差があるのだろうか。
3. 阿弥陀・地藏・観音の像が多いことは、それぞれ阿弥陀信仰・地藏信仰・観音信仰がその背景にあったことを示し、その思想的・宗教的背景を考えて行かねばならないが、同時に一石五輪塔が非常に多いことは何を示しているのか？一石五輪塔が墓であるとすればその数が極めて多いことは、この谷での宗教活動の多くの部分が葬儀にかかわるものであったことをも示していないだろうか。教義などの追求と併せて、一般人が宗教といかにかかわったのか？その側面をも追求する必要があろう。
4. これら石塔・石仏の多くは現在野ざらしになっている。今回の調査結果をもとにより精緻な調査をしてゆきたく思うが、当面、野外に所在するこれらの保存をはかってゆかねばならない。今まで調査・保存の対象とされることが少なかっただけに大方の御知恵を拝借したい。

研 究 所 要 項

I 事業概要

1. 研究所事業

イ. 朝倉氏遺跡発掘調査

第10、11、12、13、14次発掘調査

ロ. 朝倉氏遺跡環境整備

蛇谷、武家屋敷跡、民家立退地、外濠
導水工、草園造成 委託；地形測量

ハ. 石造遺物調査

ニ. 古文書調査

2. 外部調査への参加

イ. 柚山城跡（南条郡南条町）

1974年4～5月

ロ. 板取宿調査（南条郡今庄町）

1974年8月、10月 参加者 吉岡

ハ. 若狭国分寺跡（小浜市国分）

1974年10～11月 参加者 河原

ニ. 右近次郎遺跡（大野市右近次郎）

1974年10月 参加者 小野

3. 朝倉氏遺跡調査研究協議会

1974年8月 一乗谷において

4. 特別史跡地内現状変更申請について

申請された件数 16件

主な理由と面積 家屋新築等 963.7㎡

苗圃、植林等3026 ㎡

環境整備、他14707 ㎡

計 18696.7㎡

II 予 算

発掘調査費 17000千円(国庫補助5割)

環境整備費 20000千円(国庫補助5割)

研究所費 2477千円

計 39477千円

III 組織規定

福井県教育委員会行政組織規則 抜萃

(昭和46年6月1日
福井県教育委員会規則第5号)

改正 昭和46年12月23日教委規則第12号

昭和47年4月1日教委規則第3号

昭和47年10月24日教委規則第8号

第二節 出先機関（設置名称等）

第13条 出先機関として、支局、へき地、複式教育事務所、特殊教育推進事務所および文化財事務所を置く。

2. 出先機関の名称、位置および所管区域は、次表のとおりとする。

機関の区分	名称	位置	所管区域
文化財事務所	福井県教育庁朝倉氏遺跡調査研究所	福井市	福井市（特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡の指定区域）

（出先機関の所掌事務）

第15条 各出先機関の所掌する事務は、次表のとおりとする。

機関の区分	所掌事務所
	1. 史跡の発掘および発掘技法の研究に関すること。 2. 史跡の環境整備および遺構修景の研究に関すること。 3. 史跡の出土品の調査および研究に関すること。 4. 中世史の研究に関すること。

附則（昭和47年4月1日教育委員会規則第3号）

この規則は昭和47年4月1日から施行する。

IV 職 員（昭和50年3月31日現在）

氏名	官 職	担当
河原純之	教育庁技術職員 所長	考古
藤原武二	教育庁技術職員 次長	造園
水森 真	教育庁技術職員 文化財調査員	歴史
水野和雄	教育庁技術職員 文化財調査員	考古
小野正敏	教育庁技術職員 文化財調査員	考古
若田 隆	教育庁技術職員 文化財調査員	考古
吉岡泰英	教育庁技術職員 文化財調査員	建築
南洋一郎	研究補助員	
吉越 強	事務補助員	



一乗谷中心部





新10次・11次発掘区全景



◀道路全景

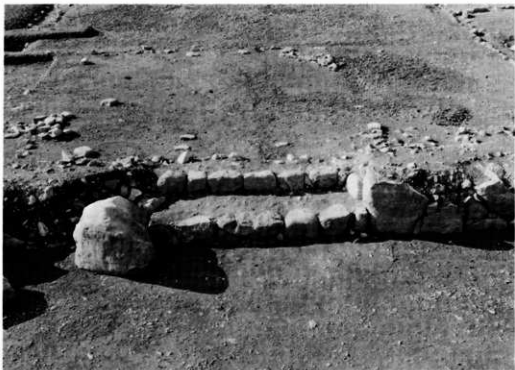
▼道路北部



噴渠・排水溝▶



◀ 新旧の道路側溝



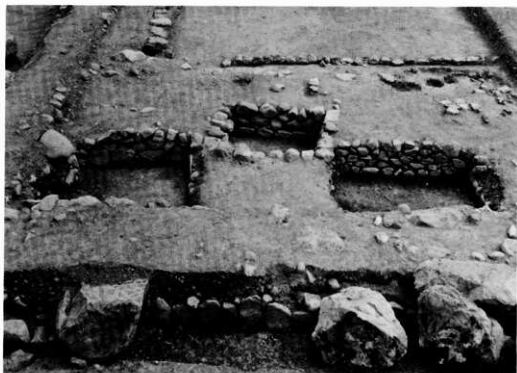
「新馬場」門・礎石建物



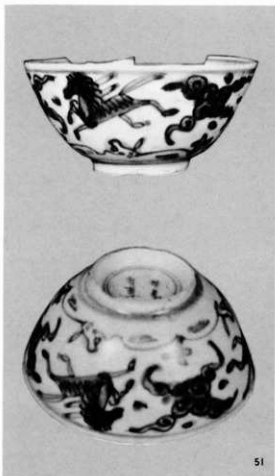
「新馬場」中央部



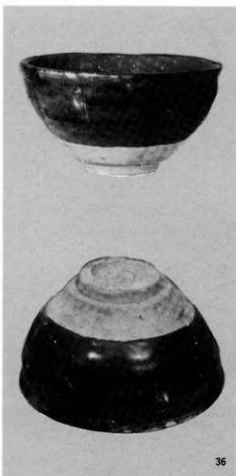
「新馬場」井戸・通路



「新馬場」石組溜坑群



51



36

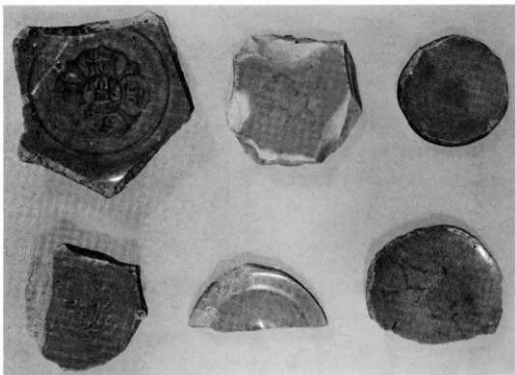


40

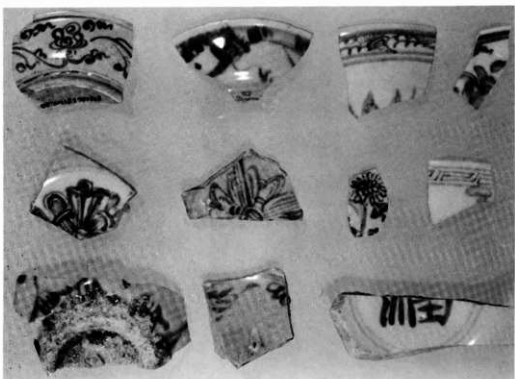


58

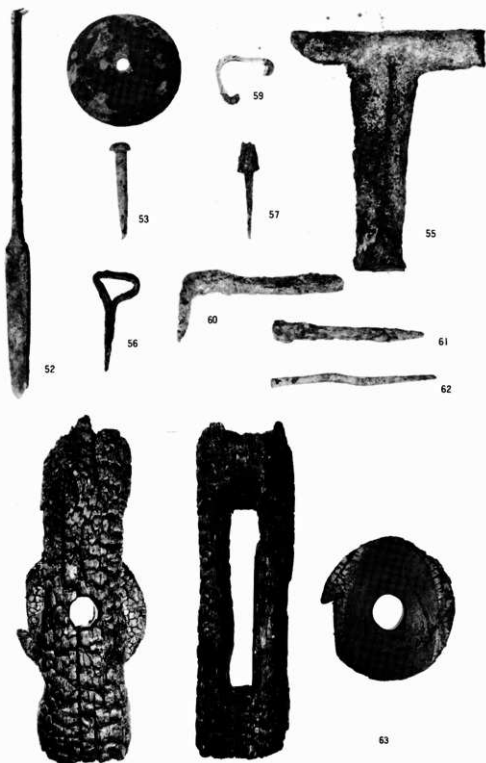
- 36 北トレンチ出土天目茶碗
 40 南トレンチ出土灰軸管炉
 51 新馬場出土染付茶碗
 58 新馬場出土銅製盤



青磁碗・皿底部 1 : 2



染付皿・碗 1 : 2



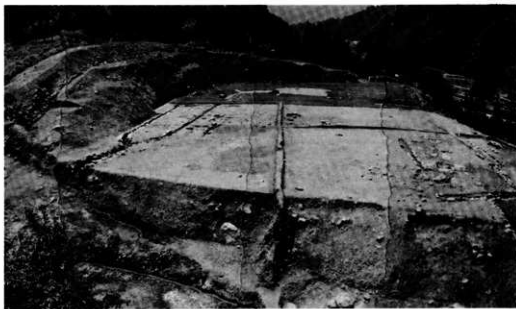
上段 金属製品 1 : 2 下段 井戸 (SE 292) 出土滑車・軸受



第12次調査全景



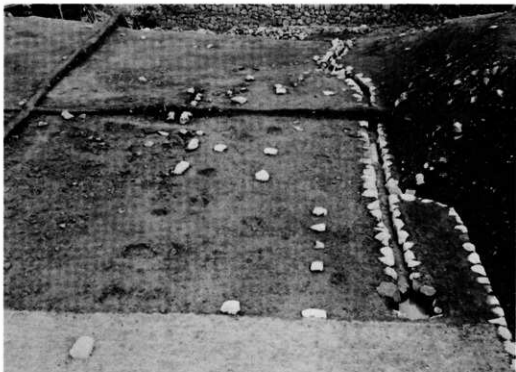
第14次調査全景



中の御殿全景 北から



中の御殿全景 南から



礎石建物及び土塁掘石組溝



礎石建物及び下層溝



中の御殿北西隅石垣



土塁北面石垣



空濠及び湯殿跡庭園南面石垣



69 青磁植木鉢

76 白磁杯

70 白磁皿

81 天目茶碗

74 白磁菊皿

87 天目皿



92



100



104

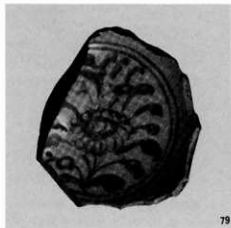


102

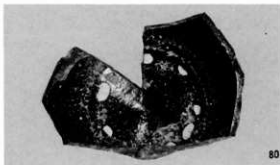


105

92 葉茶壺 104 越前鉢
100 越前壺 105 越前鉢
102 越前覆鉢

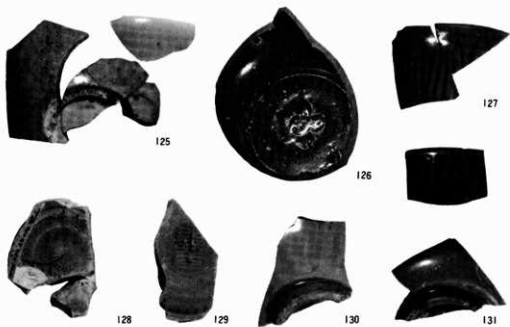


79

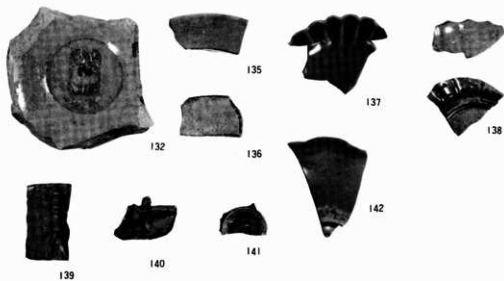


80

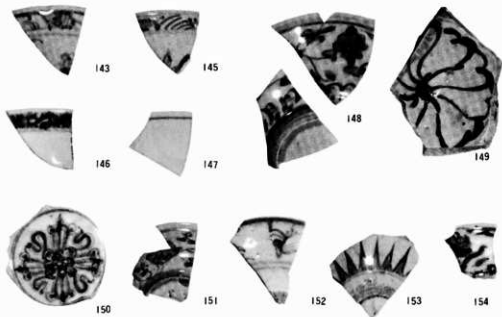
79 赤絵碗
80 朝鮮製茶碗



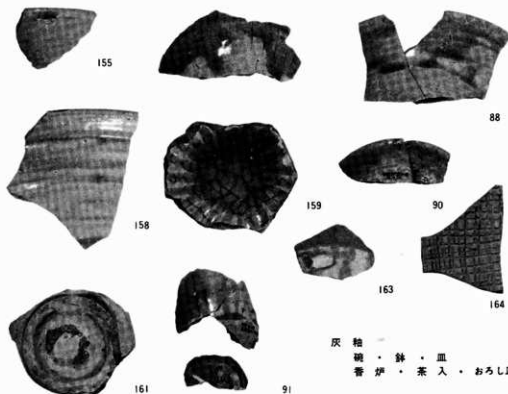
青磁碗・鉢



青磁鉢・皿・香炉・花生・合子



染付 碗・皿・杯





蛇谷整備状況 西から



遊歩橋 南西から



民家立退地整備状況 西から



武家屋敷跡整備状況 南東から



建物跡整備状況 東から



地藏菩薩 (S 110) 高57cm, 巾21cm



地藏菩薩 (S 240) 高49cm, 巾26cm



地藏菩薩 (S 78) 高54cm, 巾25cm



地藏菩薩 (S 46) 高46cm, 巾26cm



勢至菩薩 (S 236) 高54cm, 巾24cm



觀音菩薩 (S 229) 高51cm, 巾22cm



辛都婆石 (KN6)



一石宝篋印塔 (Y25)



小型題目板碑 (D99)

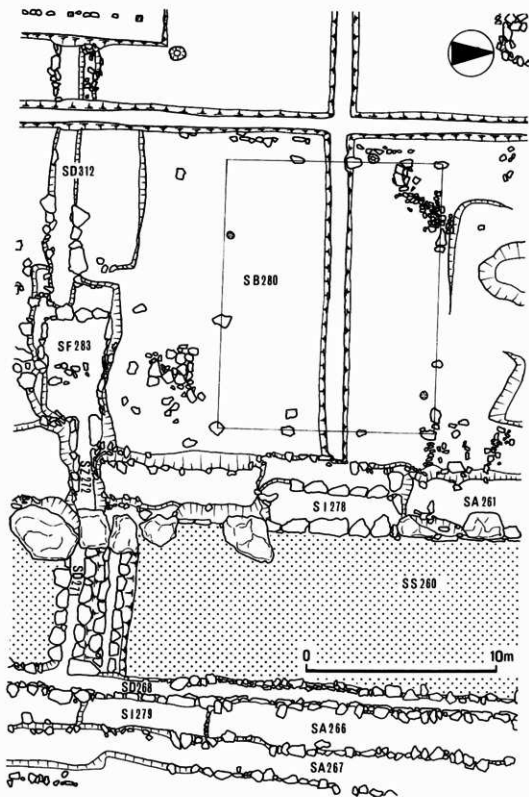


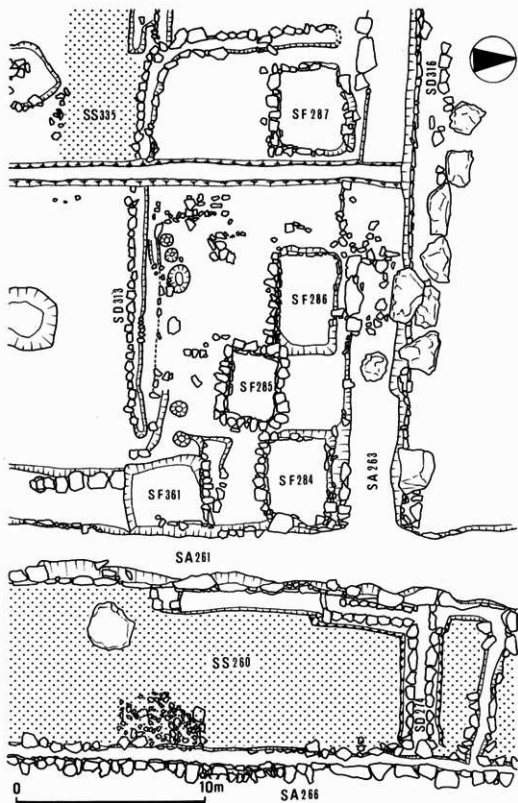
板碑 (右, 阿弥陀, 中, 五輪塔
左, 地藏, Ki144) 高59.5cm, 巾56cm

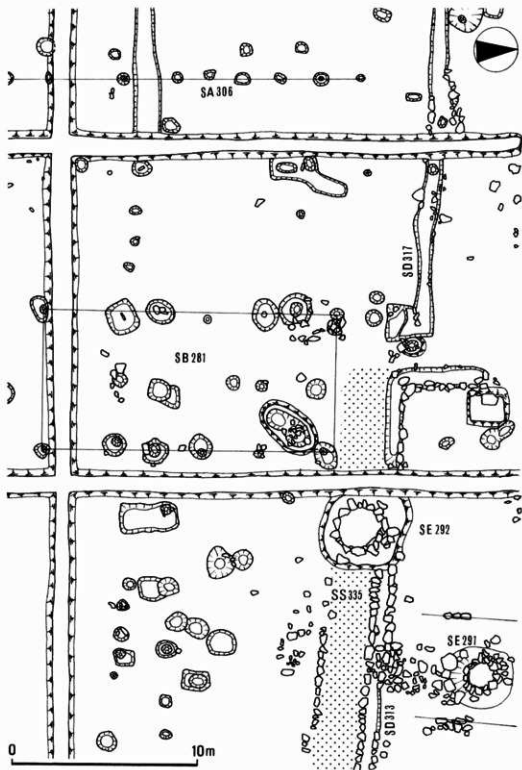


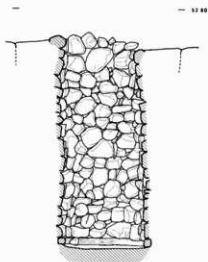
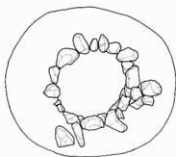
一石五輪塔地輪拓影 (An74) 跡, 東海船空居士



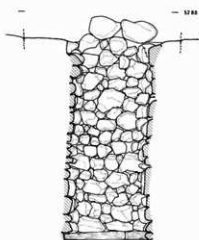




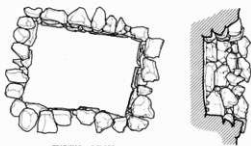




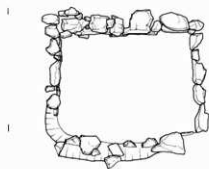
井戸 SE 292



井戸 SE 293

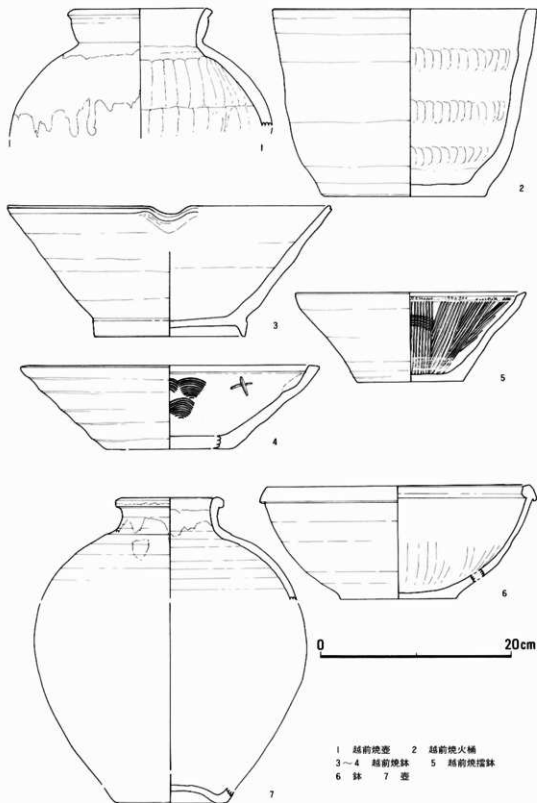


石組遺構 SF 285



石組遺構 SF 287

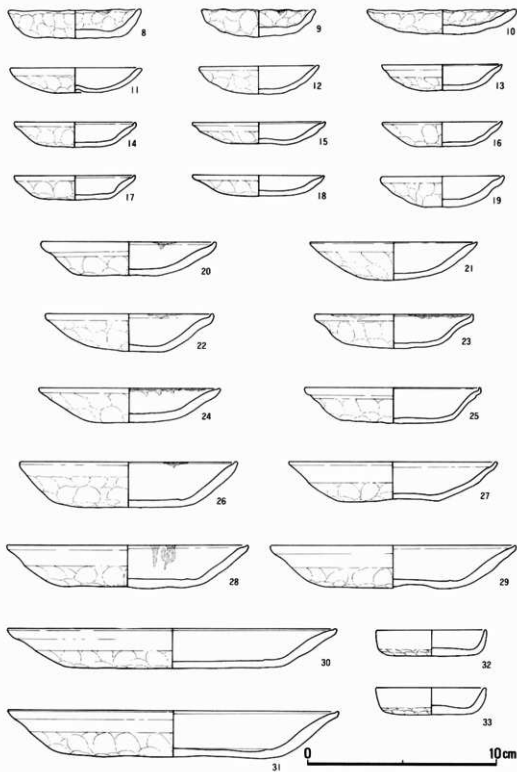




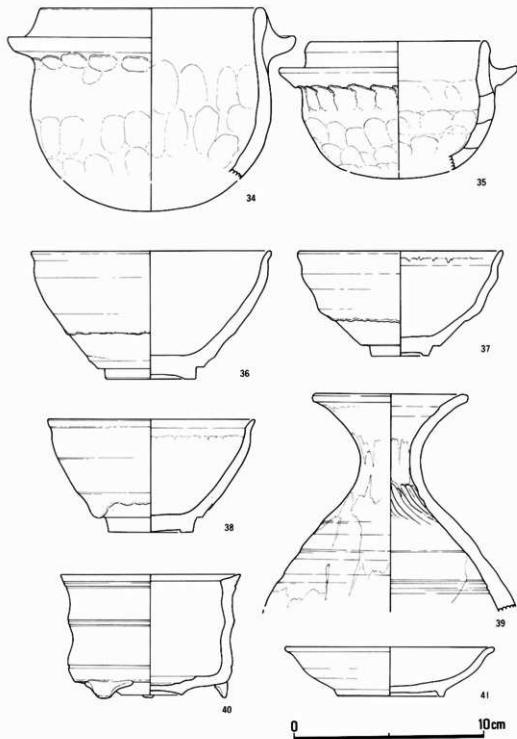
1 越前焼壺 2 越前焼火桶
 3~4 越前焼鉢 5 越前焼楕鉢
 6 鉢 7 壺

第9図

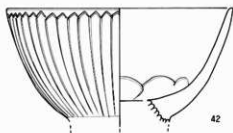
遺物実測図2)



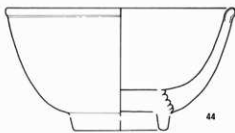
8~10 土師質小皿B類 11 土師質小皿A類 12~25 土師質小皿C類
 26~31 土師質小皿D類 32, 33 土師質小皿G類



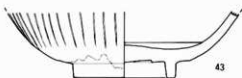
34, 35 土器質土釜 36~38 天目茶碗 39 鉄釉壺
40 灰釉香炉 41 灰釉皿



42



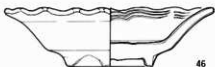
44



43



45



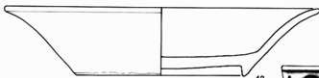
46



47



48



49



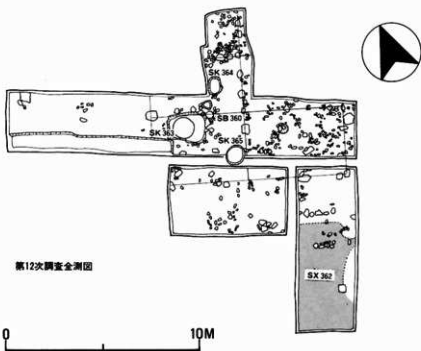
50



51

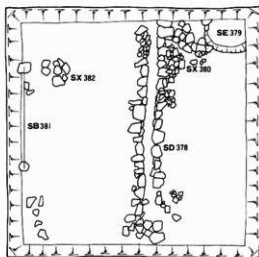
- 42, 43 青磁碗Ⅰ類 44, 45青磁碗Ⅱ類
46 青磁椀花皿 47 青磁菊花皿
48~50 白磁皿 51 染付碗

0 10cm



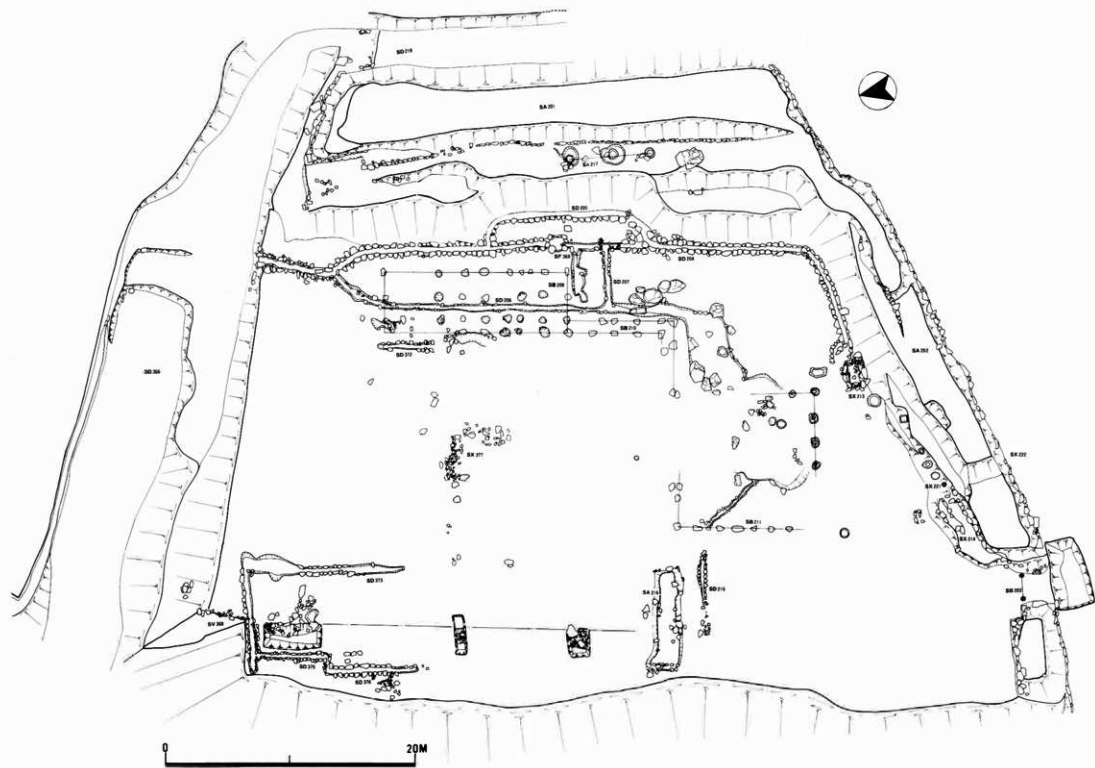
第12次調査全測図

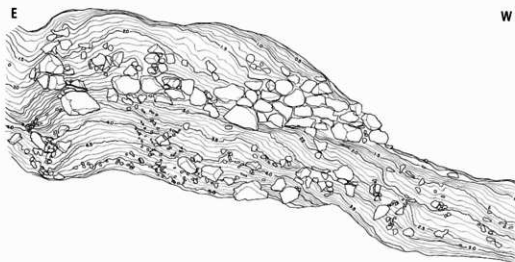
0 10M



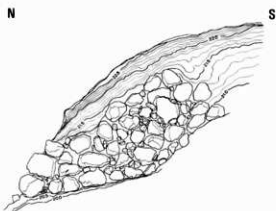
第14次調査全測図

0 5M

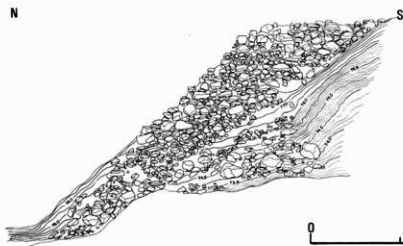




▲中の御殿東土塁北面
石垣実測図(部分)



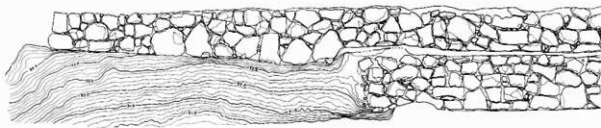
◀同上 西面石垣実測図



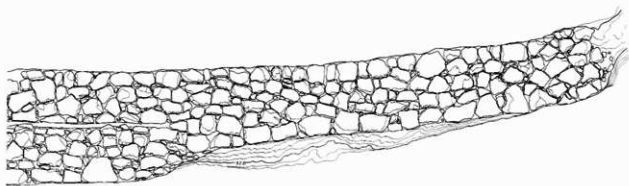
中の御殿北西隅石垣実測図



W



E

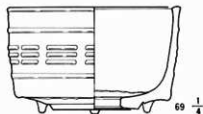


0 5M

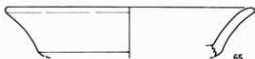
湯殿跡庭園南面石垣實測圖



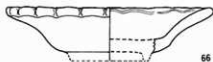
64



69 $\frac{1}{4}$



65



66



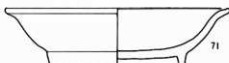
67



68



70



71



72



74



73



75



76



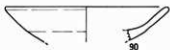
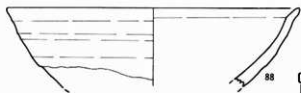
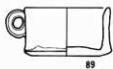
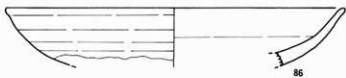
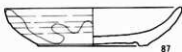
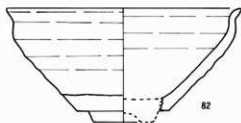
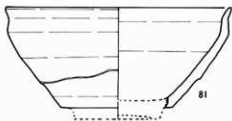
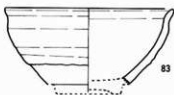
78



77

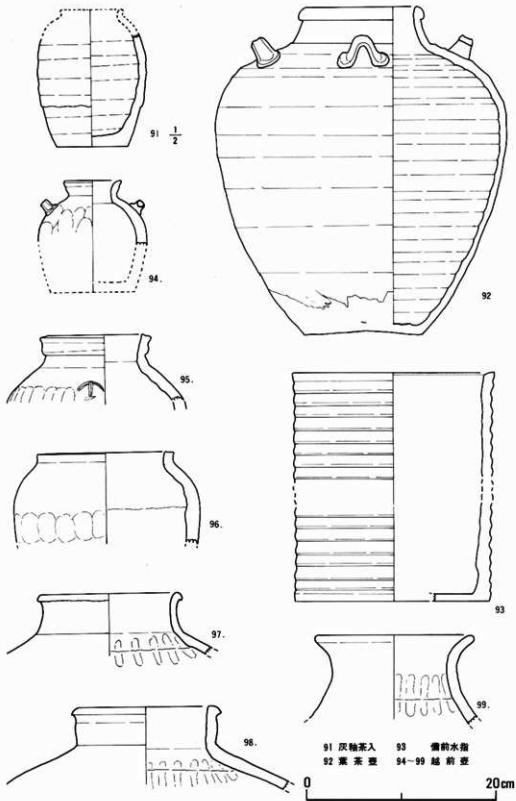
- | | | | |
|-------|------|-------|------|
| 64 | 青磁碗 | 73・74 | 白磁粥皿 |
| 65・66 | 青磁皿 | 75 | 白磁杯 |
| 67・68 | 青磁粥皿 | 76 | 白磁杯 |
| 70-72 | 白磁皿 | 77 | 染付皿 |
| | | 78 | 染付蓋 |

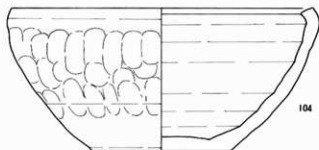
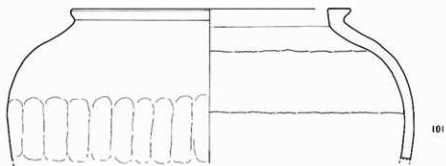
0 10cm



79 赤繪碗 88 灰繪鉢
81-85 天目茶碗 89 灰繪
86-87 鉄繪皿 90 灰繪皿

0 10cm

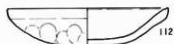
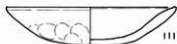




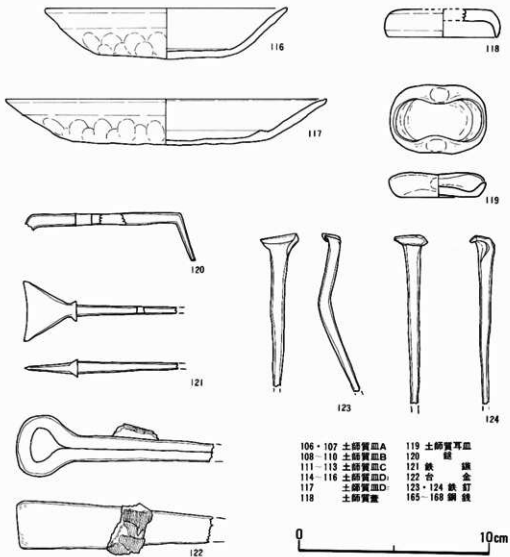
101 越前壺
102 - 103 越前椀鉢
104 - 105 越前鉢



0 20cm

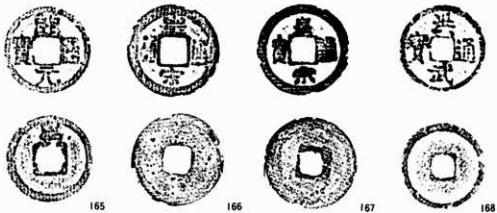


0 10cm



- | | |
|---------------|-------------|
| 106・107 土師質皿A | 119 土師質耳皿 |
| 108・110 土師質皿B | 120 鋸 |
| 111・113 土師質皿C | 121 鉄 鏃 |
| 114・116 土師質皿D | 122 金 釧 |
| 117 土師質皿D | 123・124 鉄 釘 |
| 118 土師質壺 | 165-168 銅 鏡 |

0 10cm



特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡 VI

— 昭和49年度発掘調査整備事業概報 —

昭和50年3月31日

編集発行 福井県教育委員会
朝倉氏遺跡調査研究所◎
印刷 創文堂印刷株式会社

無断転載を禁ず